あさ顔の花をめづる詞歌はなし）

月といふものよ、或は隈なきかげの到らぬ里もあるまじく照わたりて、空にもひとつ、海にもひとつ、高く深く清らなる姿の、抱きも寄せつべく、波打つ岸にはいと美麗しく光透きたる、或は人なき夕ぐれに物深き谷まの松の小枝などにさびしく懸りたる、或は花散るもありて、句ひやかに霞こめたる夜の欄干に、おぼろ〳〵と照りたる、或は積みかさねたる書冊などの上に、獨り夜ふけて刻苦する人の、窓少し明けたるに、いつも見るかげながら、殊にやさしくさし入りたる、いづれ嬉しからざらん

あかく丸き姿の、雲間おし分けつゝほのめけば、物の色かはり行きて、木立または家などのさまも、みな月のけしきになりぬ、人の顔見れば、われを嘲る如く、またみづから傲るが如く、昔の人の書きしもの出して讀めば、いづれも昔のことにして、みな飽き足らず、みづから一說出さんには、なほわれに物さびしき心地あり、壹は世の中厲りたければ出てず、獨り强ひて終日机に向ひ、夜ふけて、泉さやけき木かげにたどり寄りたるに、かの月の光のまたほの洩れて、暗きながら流の上にも清く見えたる、いかでか嬉しからざらん

毋が止むるをも聞かず、庭に走り出ててもとよりそれと撰ばん暇もなく、桃の木輕く、攀ぢ登りて、大きさうなる實ひとつふたつ、月の光に透し見つゝ、跨りげにもぎ取りたる昔さへ、夢のやうにわれを襲ひ、春といはず、秋といはず、われはまだ暮ぬより月待つ人となりぬ、かならず廣くなき渡りたる海のほとりならずとも、月見る時はわが心躍りぬ、垣根のもとの小萩が上におく露、門べの穎、とぶ雁、月見れば、これも戀しきひとつとなりぬ、やさしき人の玉章待ち詫びて、門田の稻葉見渡したるに、そよと風の吹きて、郵便といふ聲聞きしほどの嬉しさを語る人あれば、われは夜ふけて歸りたるに、もとより燈火はなくて、まだ戸もさゝぬ窓より、疊にさし入るかげのやさしさを指して答へき

世に善といふものありや、若しあらば、われはたゞ月の上にのみ識りぬ、うるはしきはかならずしも言はじ、われは愚人と笑はるゝも、月人男と聞く時は、まことにこれを拜まんとしたりき

されど野分は草木の上のみにあらず、露おきあます家の棟に跨りて、終夜獸想し

得るの健康はやがて我を去りぬ、あゝ貴き月のかげわれに添ふと思ひしは、正に握り得たりと思ひし眞理の、未だわが智識を傾けてその根底を窺ひ、未だわが理想の全部を擴げてこれを拖ひ見るに迫ばずして、忽ちわが手中には何物をも留めざりし如く、橋を渡りて蘆間の波に見し月、やがて葉もなき青桐の梢にかゝりて、玻璃の窓越しに、白き布の端よりわが病める枕にさし入るべきものとなりぬ、驚きてそのかげを追ひ、遠く走らんとすれば、頭熱して火の如し

うれしと思ひし月のかげも、見ることは難ければ、夜は疾く戸を鎖すに、われはつれなく戀人外に立たする心地す、されどわれこれを見ることは稀なるに從ひ、日くるればわれは終に潔く戸を閉ぢ、みづから慰めて云はく、月は兎に角今わが友にあらずとわれを情なしといふこと勿れ、われはたゞかくいふべき身となりぬ

われは咽喉に奔馬の如きものありて、心波甚しく激する時は、むしろ黙りぬ、露ふかき山の蔭、ほの暗き夜のさま、夜を吹く風、雨そゝぎ、皆わが敵にして、月の漏す所の光はやさしと雖も、われを殺すべき毒氣なりと

小鳥の聲して、晴れし日のかげ窓にさせば、われは言はん方なくうれし、晴れし日なるかな、晴れし日なるかな、日照らば、いかなる夏のあつさも、われは厭ふべしと思はず、戴く物もなく、全身日に照らせて、のそ〳〵と燒けしやうなる砂の上を行くも、われはいと平安にして、恰も魚の清き瀬にあるに異ならず

われは感謝して天に告げ、またわが友に語らんわれは今最も恩深き日光のもとに於て、一の美麗しき物を觀たり、照る日つゞけば形いと大きく、日かげやう〳〵洩れし曉の垣根たゞならず、何人も指して喜ぶべく、されど一點の塵だもすえずあゝ牽牛花のうつくしきはわれ嘗てこれを識れり、されど今これを觀るに、その美麗しきこと豈に限あらんや、豈に限あらんや

まづこれにて出來しと思ひながら汗ふきて、さて勝手なことを書いたものだと、みづから大笑して筆を擲ちぬ

八月十四日

けふは思ひ出てしことあり

新に設けしといふ停車場まで乘りて、滝車を下り、いづこと志すべき方はなく、梢の林繁れるほどにもあらず、夏の日かげちらつく木の間の路に、泉の迸るに驚かされ

ていくたびか跳ね退き、桔梗など咲く草原にこれはまたひるがほの花のいと大きく珍らしきに心奪はれ、鮎子ひかれる溪流に、たくましき男の一人網打つを見、岩削りしやうなる山に、松青く、雲の棚引くを仰ぎ、車に乘らんとすれば、車なく、偶ま見出てたる家の軒端涼しかりけれど、慾ふにはあらで往くべき方を尋ね、踏めば塵たつ畠間の路にいよ〳〵汗の流れし時、遙に青き絹涵しゝやうな川一筋見えしに、これは〳〵と躍りゆき、中央ばかりを殘して、川の瀨乾き、石のいと大きなる、小なるごろ〳〵として、足もと危かりけれと倒れず、漸く漕ぎ出しゝ渡舟呼び戻し、さて川を渉りて行けば、村あり、村を過ぐればまた川あり、流いと廣し、流に添ひ小松山の端を遶ぐれば、水ぎはの芝生に高く嘶きて、野馬驟に躍り出づ、避けんとすれば路なく、われは此時あわてゝ、夢に走らんとする如くなりき

笑ふべし、この愚物は今なほ昔の如し

雲水漫錄

夫れ旅行の樂は人生快樂の一にして、而も其最も罪なく且大なるものなりと謂ふべし、而して其樂しき所以は一に飄然、忽然として、一物の我を留するなく、一事の吾を煩すなく、身を以て宇宙の大觀察者となし、人情と自然との天使となし時に意外の境遇を踏て意外の興味を覺ふるに在り、其過ぐる所は必しも漁村と莊邑とを問はざるなり、其投ずる所は亦た山亭と田家との別なきなり、日出てゝ歩み、日沒すれば止り、唯夫れ悠々として足の向ふ所に隨ふのみ、其之く所を問ふ者あれば、則ち答て曰く、我亦自ら知らずと、余等雲水の遊、蓋亦此に外ならず、而して其眞の快味の如きに至りては余等二人と雖も互に自ら語ると能はざるなり、況や此行を共にせざる者に於てをや

雲水漫錄成るに先つ數日　雨行脚識

第一　出門去

今歲初冬十一月二十二日、曉を拂ふて雲子、凸子將に總房二州雲水最も佳なるの間に遊んとし、除隊兵士の裝、一箇の小布呂敷包を肩にして凸子先づ寓樓の階を下り靴を穿つ、時に、一家の間、皆、猶深く睡つて、階下の燈火影幾に殘り、臺所未だかたりともせず、靜に聽けば二階の方に當りて書筐の開き且つ蒼皇して閉さるゝ物音す、其

音止めば薄暗き家の裡、再び冥寂として、程なくすれば又人の急ぎ立つ足音す、雲子乃ち洋裝に輕き草鞋を穿ち、飄然階を降り來れり、是に於て二子共に戸を推し外に出れば、歲星快く曉を照して、兩個の淡影微に地に在り、門を出て〻行く事數丁、凸子試に雲子を顧れば雲子書冊若干を肩にす、其書は即ちバーク傳一卷、畢史一卷、及高青邱詩鈔三卷となり、而して凸子又聖經一卷、フローベル一卷を齎し、之と併せ裹む所のものは好し是鮑塊數片、

第二　水可渡兮

水霧漸く破れて朝暾始て出る處、をちこちの蓬窓より、炊煙白く蒸騰る處、横さまに帆檣より、帆檣に射當れる朝日影折れて水に入り、水波躍て燿めく處、總房の山は猶遠く雲烟の外に縹渺たる處——

船頭數人、靈岸の川口に傳馬を艤して待つ、

幾多の旅客どや〳〵と其傳馬に乘る、少時は旅客と船頭と互に相罵り、船頭終に繩を解き傳馬を出せば旅客漸く靜まる、船頭是に於て朝の力に任せ勢好く棹を水に突き張れば滿腹の大氣快よげに口の邊に迸り、漕ぎて、漕ぎて程なく傳馬は一の流船の横腹に着けば、相續て旅客の中より先づ躍て本船に飛び入る者あり、

汽笛既に其聲を擧ぐれば乘客座漸く定まり、後は談話紛紜として起りぬ、而して中更に聲あり曰く

蘆葭淺渚鷗鷺閑、　幾幅歸帆指點間、
晴日影昇連檣外、　水煙猶沒二州山、

而して船總房二州の雲烟を指して遠く品灣の冲合に出離るに迫ては、二箇の佳少年靜に甲板の上に顯れて居たりき、一は優容椅子に靠り懸り、一は其傍に突き立ち、一は紙を展べて頻と筆を動し、一は吟眸を瞰せて頻と得意になり、共に頻と句を敲て、折から急に一人のいふ

白雲流水跡飄然、　我愛放浪李謫仙、
破帽弊衣書數卷、　今朝笑上五湖船、

如何、雲子？と、雲子聲に應じて朗咏して曰く

偸得浮生半日閑、　江山隨處養天眞、
忽然回首吾忘我、　我是繫思談理人

と。時に芙蓉峯一帶の山脈は歷々二子の眼中に入り來て、天晴れ、波又穩、凸子輿に乘じて亦紙を示す、其詩

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

船頭一望天茫渺、右指蘆柄以北山。

未起承を得ず、相與に沈思之を久ふす。

既にして船を擡つ波浪漸くや高く、船體少しく動く。二子因て飄然として頭を擧ぐれば、船既に觀音岬に近づいて走り、房山の山色一々指すべきなり、雲子句ありいふ

武山南走碧崔嵬、柄轉瑠璃一鏡開。

一鏡將開觀音岬、翠巒高聳水晶臺。

蓋此間の景光は甚く二子の佳懷を動して二子、一は巖頭の獅子深き睡より覺て徐に頂毛の上に宿れる露滴を振ひ落し一は軍に臨める良馬遙に鋒鋩の閃を見てにや〳〵と一笑するの意氣込にて、兩の手に鞄を劈き乍ら齊しく甲板の上に起ち上り、前を後を相顧盼するの間、船は何時しか鋸山の直下――山影水光互に相映帶する處に着く。二子絕叫、端舟の上に身をば飄と躍したり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

笛聲吹破寒江霧百里蒼波水可渡自覺舟行去岸遙模糊纔認遠村樹

（某　氏）

第三　山可攀兮

保田より步して鋸山の麓に到る。平沙一帶、脚甚だ輕し。過る所、野人の籬畔夥く水仙の蕾生するを見る。少しく山を攀れば亦益多し。而して丹楓の樹又處々に晩秋の勝光を占め、景や冲澹、樂んで路を拾ひ益々登れば一古宇あり、柴扉に傍べる山茶の花自ら地に落て、寺に通ずる小石橋の下には、鮑を傳はり落る流泉聽て――僅に聲あり。寺は半ば深く戸を扃す。所謂日本寺なり。橋を過て靜に寺の後庭に廻れば其庭の半面に先つ枯たる芝生を見、左側には奇石あり長さ五六尺許、自然龜形を爲す。右小高き處には、碑兩片あり、而して前は乃ち渺たり茫たる海灣、白沙の濱遠く續き、巉巖適ま紅青相賸染せる樹木に掩はれて其間を橫絕し凡そ眼に撥る所の景光自然皆人に適はざるはなし。傍に立つ所の碑、一は松塘翁が此地の月光水色を歌へるものを

錄せしなり其歌に曰、

天上何夜無明月中秋月色分豪末人間何處無清景鋸山景物塵境君
不見鋸山峯々如劒矛割破人間萬古愁我來適逢中秋夜坐看水輪出
九齒西風吹暑天高朗寒光横海萬丈流浮雲明滅千山影獨立絶頂縹
渺之飛樓夜深山愈靜萬壑絶鳴籟光射魑魅驚明逼鬼神恠悄然坐我
上清界但覺蕭爽襟懷快雲間玉簫一聲落仰見飛仙駕鸞背道人勸我
醽醁杯一醉杳然忘形骸吾將揮手從此去雲霧咫尺是蓬萊千年華表
見老鶴便是呑海樓上客

癸卯中秋鋸山呑海樓觀月醉中作歌

寺を出て〻又少しく登れば、亦復水仙の多く路傍に青を抽くを見る。因て試に其の一株を拔くに、珠根の生、豌厚の葉全く水仙なり然れども稍や其蕾あるものを取り之を嗅ぐに更に香なし。雲子乃ち戲て曰く是眞仙に非ざるも即ち俗仙亦豈に大に愛す可からざらんやと。二子笑て共に採集、數根を得、雲子之を携ひて去る。雲子の句に云

品水評山一日程　半肩行李客身輕
自今雲外采青去　欲學濂洲惹穩生

註日常醫少壯流寓于濂洲有暇則孤單步採集植物以爲樂故及

是より山路少しく急、二人の旅客の外には他に其路を上る者もなく、降る者もなく、傍に立つ木は皆低く、また老杉古松の勃萃として日を遮るはあらず、去れど四下は霜枯になる一面の冬樹立、孰の木の葉も黄金色して未だ全く枝を脱せず、林木に隔て〻時に薪を伐る音響くも、たゞ其響くを聞くのみ、其處の木の葉隱に更に見へ分かず、路は荒れ人は雙。

登り又登る。

半腹にて細逕二條に分る。一は右に去り、一は左に走て、二子歩を停て之を察するに、左せんか石洞前に在り、右せんか、草木下り蔽ひ、路窮るかと疑ふ、二子乃ち左す。而して靜に石洞の裡に入れば、石像新に成れる者碌々右側に列り立つ、其前を通り又行く事數十歩。

路窮る、二子因て再び石像の前に到り立つ、少時、凸子洋服の角支を探て矢立を取

り出せば雪子直に筆を取り、石像最も新なるものを撰て左の數語を留め題す

爲我黨三仙菩提　雲水兩行脚

題し了りて雲子肩を張り動せり。凸子笑て其筆を納め共に石洞を出つ

是に於て右道を取り又行く事數百武。路は巉壁の下に通じて小笹叢、上より蔽ひ蒙り。下は即ち斷崖、黃葉の樹焉を緣取る。二子相逐ふて其間を行く事又數十步。路少し く左に轉じて愈々盡るかと疑ふ。試に人に問はんとすれば固より隻影を見す。山深く、逕細く、たゞ下には萬山寂として遠く連るを見るのみ。而して木葉又聒として動かす。冬の日は扶疎なる樹の間より穉に小なる日影をば四ッ二ッ落したり。時しも前方に當りて、遙に人の降り來る跫音低けれども高く、靜けき宇宙を破れり。二子步を停て之を待てば其跫音忽近くなり、又遠くなり、扨は一倍の物靜けさ。凸子待つに堪へずして、足を擧れば。雲子亦其後に進み。數步を轉すれば、二子忽ち冷乎と面を掠め撲つものあるを覺ふ。二子驚て頭を仰げば、一條の懸泉高きより倒に路傍に落つるなり。而して山上は更に寂として亦人影なし。二子相顧て笑へり。

二子既に路の依る所を知らず。然れとも二子の志唯だ至上所に在り。荊棘を排し、頑石を履み。唯だ只だ上を、上をと指し上れば。路なきかと疑ふ所、忽ち道あり。人なきかと思ふ所、忽ち人あり。終に山上に達し。茲に愉快の袍を劈きぬ。

四顧絕佳

日既に傾いて、二子猶ほ山上に在り。臂を張擴げて、芝草の上に半ば横に倒れ、共に首を擧てヲマルチーヌの所謂、晩輝水に入て波頭薔薇花の花咲くを見る。之を久ふして凸子先づ起き直れば、雲子既に其所を下り。夕陽紅葉正に佳なるの間に立て長嘯す。

仰見奇峰俯碧灣、鳥徑千仞險難攀、攀來試立峰頭望、黃葉夕陽無限山、

凸子乃ち行く其後に隨ひ、閑雲野鶴を追ふて、共に偕に山を下る。

* * * * * * *

水可渡山可攀遊人既在白雲間回顧笑望皈來路落日孤帆碧一灣

（某　氏）

第四　何所に行かばや

Where Should I steer? Byron

初、二子の保田に上るや、一旗亭に憩ふ。而して午餐を了りて將に出て去らんとす。亭の主人懇に自ら靴と草鞋とを二子の前に整へ、問ふて曰。客將に何所にか往んとはする。是より北條に向はんとし給はゞ鋸山を登るも又此所に歸り來らざるを得ず、若夫鹿野山にと志し給ふか乃ち鋸山を登り盡して直に金谷に向て下る事を得らるべし。然れども其路は甚だ險なれば山頂より又此地に向て下り來るを順とす。知らず貴客等意の向ふ所は如何にと。二子半ば聞かざる爲して、雲子は草鞋を取り、凸子は靴を穿つ。而して將に愈々立んとすれば、主人頻に三子を要して路の由る所を問ふ。二子相顧み笑て曰く、然吾人は今正に鋸山に向ふを知る。左れど其先に至ては吾人と雖も自ら未だ知る能はざるなり。あゝ我や何所にか行くべきと。而して二子既に鋸山を下るに及ては其足直に金谷に向へり。然れども二子の足何故に金谷に向ひしや二子互に自ら其然る所以を知らざりき。

* * * * * *

野鶴閑雲無定蹤登山渡水若爲容月明今夜向何處秋在寒流

石上松

（某　氏）

第五　旅枕

海邊の冬の日は昏しやうにて容易に暮やらず。遙の冲向に燈臺の火見えしより一里餘も行き〳〵て、漸く片側の山合より闇が次第に押し廣まりつ、幾點の星明を道のしるべに、二人の旅客が竹岡といふに着きし頃は、早や農家の晩餐を濟みて、表の雨戸は乃翁の話聲をば薄暗き燈の光と共に往來に漏したり。

既に一の旗亭に宿る。

而して雲子浴に入るの間、亭の主人來て凸子と相語る。主人朴訥、談偶ま近海產する所、魚介の事に及ぶ。凸子暗に諷して曰く余等薄暮金谷を過ぎ、漁夫、一種の魚を籃に滿て行くを見る。其狀小なる鯛の如にして、更に赤し。而して其口は「ダボハゼ」の如し。長さ四五寸許。知らず是何の魚ぞ。主人懇に說て曰く彼は「カサゴ」と申し、金谷の沿岸最も多く產する所と。凸子更に機を得、語を續て曰く余等今日保田にて食せし所のもの甚だ彼に類す。其味ゾク〳〵乎として太だ惡し。思ふに聞く所の「カサゴ」なる無からんやと。主人當に其然るべきを贊して去る。

既にして雲子浴を出て來る。凸子告ぐるに實を以てす。雲子手を拍て笑て曰く明早

は主人彼の魚を饗せん事必せり、而して吾子先づ之を罵る、凸子妙計と、因て二子、相に相慶し凸子又浴に趨く。

夜半、凸子齒を痛め、眠るべからず、而して雲子鼾聲雷の如し、凸子勉て再び眠らんとすれば、齒痛益々激して如何ともすべからず、是に於て枕上の書卷を取り繙讀數回、又覺へず眠に入る、

既にして又覺む。

覺むれは齒痛既に去り、前夢の跡を尋るに茫として追ふ可らず、惟見れば、金谷の沿岸潮退て岩礁一々沙るべきもの、夕陽將に沒せんとして餘光猶ほ水際の漁屋を照すもの、鋸山の景光絶佳なるもの、暗々裡に隧道を過りて雲子の面影だに辨すべからざりしもの、端なく眼前に掩ひ現はれ、魂髣髴として山影水光の間に游ぶ、忽ち此時傍にて人の身動するに驚き顧れば、雲子少しく首を擡げて自ら知らざるもの、如く、又忽ち衾を蒙る、時に行燈の火、甚た然え下りて、猶ほ天井に依微たる長方形の影を宿し、家は嚴に寢靜まり、村犬の吠遠く聲寒く、枕を欹れば遙に海水の轟轟たるを聞くのみ。

翌朝となる。

二子、膳部の出るを見れば、昨宵凸子罵りし所の「カサゴ」揚々として膳の一部を占め、其尾、其頭、全く皿の外に陸梁たりき。

* * * * * *

旅枕依稀宿短蓬蓬濤聲欹耳雨耶風遊人收在孤燈外水色山光夢中

第六　一歩一眄

佳なる哉雲水、美なる哉宇宙、吾子將に何の辭を以て此朝暾の山を出るを感謝せんとする乎、凸子。

然り、今は清曉、好し彼樹抄の小禽正に朝課の讃美を歌ふ、雲水の——宇宙の美にして美なる、願くは獨り彼小禽が縱に讃美するに任せよ、聞け、海は果して何の聲を爲すか、思ふに雲子、吾等は將た何人の口より斯る聲を聞く事を得べきか。

斯くて二子行々相唱和し、水に別れて終に一村驛に入れば、郵便の函あり人の軒頭に掲ぐ、二子覺へす其家に入り、雲子筆を走らし、朝來見る所を前日の遊踪及び未來

の行程と併せ書して友人俗仙子に報ぜり凸子云く快と、雲子云く快と、其端書に曰く

昨朝京を發し竹田に着し鋸山に攀ぢ絶頂に坐してパンを劈き下て夜竹岡に泊す今朝將に鹿野山に赴かんとす港町を過ぐ路木更津と鹿野山に分るゝ處海水灣をなし山光水色媚を極む快言ふ可らず不覺筆を走らすして兄に寄すること然り……明日午後木更津を發し夕方家に在らん。

此日二子輿に乘じて路を失し亭午の入頃に迄て漸く鹿野山在りき。

而して二子先づ山祠に詣んとて其處に尋ね到り雲子祠前に賣る所の飴を買ひ携へて共に堂に上る時に天漸く曇り山雨動もすれば來りなんとす凸子戯に當時の事情を手抄して曰く

堂の裡えは入ッて見ると正面の賽錢箱の前に大きな鈴が下ッてあるが二人は一文も擲る信向はなかつた一人はたゞ滑稽めいた身振て面白さうに其鈴の太い緒を捕まへ思ふ存分に鳴らそうと懸ッたが鈴は中々大きな聲をしなんだ其内一人は有難い札の飾ってある前て何かかた〳〵と——何に飴を蝙蝠傘の柄て打碎き始めた。

「あゝ甘いな程なく一人が曰つた。

堂は至て狹けれど二人の外には誰も居ず全く沈として肌薄寒く覺えられた鈴と戯れてゐた一人も今は飴の御相伴を始めて二人とも少時は物も言はず無邪氣に飴を嘗て居たりしが急に何か相談をして守札が買たくなり見れば七十ばかりの老翁が一人堂の奥の方に縮こまつて居た。

オイ老翁一番安い御符は何程ですか？

ヘィと曰ッて老翁は立て出て來た而して不景氣な顏から眼をきよろ附せながら二人の樣子を見渡して

御符ですか？是が一番安い三厘づゝに仕しまやう。

それじゃ二枚丈け御受け申ましやう。

と曰ッて一人が一錢の銅貨を取り出すと他の一人が口に含だ飴を呑込ながら樣子ありげに

夫れ其大いのは何程だ？——あゝ甘い…

是てすか？五厘にして置きましよう。

すると又一人が益々滑戯の音度を取て

じや老翁小の二枚と大の一枚とで一錢に贏ろな宜いだらう老翁。

老翁、澁て何とも曰ひません。

好し、それじや大のと小のと一枚つゝ買ッて殘二厘は此寺へ御寄附申ましよ

うゝ――八厘で御符受るも身の因果殘二厘は南無喜捨佛か。

老翁は木偶の笑ひ出したやうな顏をして、急に二人の國所を尋たが左も此符を

如何するのかと曰ふやうに差し出した。二人は其を受取ると可笑くつて堪らな

んだ、何が？

二人とも今は益々可笑くなつて堪らず、ホッ〳〵と曰ッて堂の外に躍り出した。

而して二人は曰へる

あ、あ、好い手土産を買ッた。

斯くて堂を出て、一旗亭に入る。亭は眼下に十三州を見渡し、登臨の美なる、爲に雲子

を驅て詩思を横逸せしめたりき。

鹿峰高處放吟眸、倚得山頭第一樓、笑指京城晴雨裡、烟雲縹渺十三州

而して二子黙ひながらにして聞けば、鹿野山固と九十九谷の勝あり、來り遊ぶ者皆

必ず先づ之を訪ふといふ。是に於て二子食を了れば直に焉に赴く。凸子の手抄に曰

く

鹿野山の宿を出盡ると、盡頭に二軒の腰掛茶屋が向き合て飴を賣てゐる。其前を

通り貫けて曲らず正直に行くと、坂があつて、板を登ると所謂公園地、茅萱など亂

倒してある間に一片の碑が建てある。一人は躍て先へ坂を駈け上て其碑文を讀

み出したかと思ふと、直ぐ又其處を去り、數歩ばかりも行くかと思ふと急に何か

《あッ》と曰ッた、後から行た一人が何かと思ッて其處に馳せ附ると、ああ實に美い

た、足元には大小の鹿が幾疋ともなく頭を下げて谿水を呑てゐるものを、而も生

々として、否、其鹿と見ゆるは一々皆黄葉した小山であるものを？

あゝ是が九十九谷か！水こそ無いが、あゝ實に絶勝だ、そう實に！

と曰ッたばかり二人とも言葉はありません、折ふし山雨はチラホラ落て來て、雲

は遠い處から段々山を裹み始め、遠山は既に隱れてしまつた。然し二人は頻と吟

肩を聳して

一句…啼破萬山秋？

そう！

實に愉快だな。九十九谿……九十九谿……あ君何とか附きそうなもんだな？

そう？

と曰ッて一人は少時考へ

題詩却恐殺風景……偏見……遙巒雲自由……如何だらう？

雲自由？穩でないか。然し……

雨は其内に又晴れかゝつた。二人は益々得意になつて見て居ると、群巒の間、愛らしき數戸の村があり、珍らしく一叢の竹篁が見へる。而して其竹篁の端からは或は瓦の片側が白く出てゐて、あゝ雨催ひの秋の空！母屋とも思へる或萱葺の屋根の上には引窓から出る細の烟が靜に横に倒れて動かず見へる。加之に其村の前に出るには黄葉した小山と小山との間を過て細い小逕が設てある。試に通て見たらさぞ面白さうな小逕が二人の頭の中では二人して既に其小逕を歩てゐる

然し最う行う。

と一人が終に言ッた。すると他の一人も其の意に從ひました左も氣のなさそうに。

而して二人とも坂を下て腰懸茶屋の前に來ると、一人はずッと左側の茶屋に這入り込だ。何に？

飴を買ひに。

斯くて一方の茶屋の横手から、木更津に趣く路を曲つて行くと、又しても山雨は落て來た。二人は少しく足を早めて後になり先になり段々山を降て行くと、雨は愈々本降となッた。而して雲霧は模糊として一面に掩ひ覆ッて、後を顧れば過き來し山々は其所在を失ッて仕まつた。

一里ばかりも歩た頃であつた二岐の路に出逢つて尋る者もなく二人とも困ッて佇立て居ると、竹籔を曲ッてどつたりばたッり來る者がある。催馬者でした。一人が唐突に木更津え行く跡はと問へば、其催馬者恭しくチョィと頬裏を解き

正直に行かッせい。私も木更津へ越くのですが、ナァに正直に行きさへすりあ木更津です。

二人とも敎はッた通、正直に行げば、成程路傍の標杭に、從是西北木更津道　四里幾町と書てあッた。其所て立停ッて、一人が草鞋の緒を締てゐると、程なく其内に前の催馬者に追ひ越された。一二町も時に雨は少しく小歇になつて來た。二人はそれ追ひ越さんとて驟に急ぎ出した。

初、二子謂らく前の山を越れば則ち木更津を見る事を得んと、相約して木更津の見ゆるまては餐て飴の包を開かざらん事を期せり。然るに二子既に一山を超ゆれば更に山あり。此山こそはと思ひて又超ゆれば更に亦山あり。而して木更津は杳として更に見るを得べからず。是に於て二子ヤッキとなり山を越へ、山を超へ凡そ行く事三里餘。漸く鬼崔を辭する事を得ば、快なる哉、木更津は直に其前に在りき。因て二子相慶して裏を開きつ、飴を含て木更津の宿に入れば、前の催馬者、二子の後より聲をゞ懸たりける

此夜は二子雨を聽て穩々木更津の客舍に眠りぬ。

因にいふ。翌朝雨晴る。二子、町を歩き廻りて、饅頭屋の軒を隔てゝ二戸あるを見る二子足を停て伺へば其店の奥の方に、幾個の饅頭猶ほやゝとして煙の起つを瞥見し、二子情に堪へず、食指頻に動く、之に於て雲子二百文の銅錢を出して一の家にて之を購ひ一方の袖に入れ、又同じく二百文を投じて他の家に於て之を購ひ他の袖に入れ、兩の袖を太らして旅亭に來り歸り、又手、其饅頭を打食へば其味殊に絶佳、兩頰皆な落つ。二子相與に笑て語て曰く、余等雲水の遊、雲水の外忘るべからざるもの二あり、鹿野山の飴、木更津の饅頭即是なりと、而して此の二物の味は二子京に歸りて後も猶は情に忘るゝ能はざりしと云ふ。左れば此話柄、今茲に附記せざれば恐くは此雲水漫錄の一缺陷たらん。故に敢て茲に附記す。

* * * * * *

第七　一雙の放鶴、翼を揖て、故棲に歸る。

二子既に雲水の游を終りて昏黑、京に入り、木更津より齎す所の貝類若干を携ひて直に星仙を襲ふ。而して星仙と急に藥て之を食ひ且つ話し、寓に歸れば俗仙子の端書先づ机頭に在て二子を待つ。其端書

鋸山々頭鋸して麓を劈き、鹿野峯上笑て帝都を指す。其意氣洶に壯快といふべし。

夫れ然り、半日の休學、一枚の外套、何ぞ々々惜むに足らんや若夫れ山光水色の快味の如きに至りては、請ふ他日、仙眉に接して之を問んのみ。

二十五日　　俗仙子

月かげ

第一

鐘の音

むかし今人やは聞く鐘の音
此世めてたく告げそめし
その鐘の音もあはれ世は
名殘と告ぐる鐘の音

懇しき人のありとても
あたら雀の地に落ちば
ざびしき野邊の鐘の音
なに樂しみに數へまし

第二

親子が別々に乘つたる二輛の車はいつしか人里離れて、遠近のほども見分らぬ山路にと差懸れりき。

行く路先はたゞ細々と見え渡りて行いても〳〵まだ遠く、車の兩わきには松林透せば楢林蓊に茂つて草、荊棘、逆へぬまで亂らに生へふさがり、其間々には氣まぐれなる樵子、火の斯う紅く燃えついたやうなる花を綻し、むごいほど沿邊が荒に荒る、霧のやうにどうやら山雨、木の間を降つて來たかと見れば、たちまち上り、何處よりも更に人の聲はせず。

荷馬の蹄痕深くも地にめりこんたる處、車きわどく斜になれば。

「あゝお登志といひて。

母は樂い夢の覺めたる顔して、前を見やりながら。

「お隣へもちよいと顔を出して來ると好かつたね。

お登志は半ば後をふりむき。

「伯母さんの家の、といふ。

「あゝと答へて。

母も洋傘に深う身を隠しぬ。何の爲めにか夏の日は頻に照出して、蒸暑となつて、行々木蔭もなくなッて、子故とは曰へ何故なんなに苦むのか苦くつて、何故こんなに車はころげるのか懶くッて何故こんな山路があるのか淋くつて、傍の樹の枝には誰かくやしさうに草鞋を片々投げつけてある、母は汗拭を出してあゝ暑いと思ふに、餘りと曰へば意地らしき日の照やう。

折々風のもうッと動す草のいきれに、お登志はいく度か車の上に身をかわしぬ、それは動ともすれば惡らしい蜘蛛が路々頭の上に巣を懸渡してあれり、お登志は洋傘を横にして其度々、然もいま〳〵しさうに拂除けながら、何か云はうとしては又沈みかへる。

前の車がふと停れば、後のは覺えず二歩三歩跡戻せしが、程なく又共に走りだした

り。

お登志は何氣なく行先々を見やれど、遥に路はいき蠢りて、急に曲れるやうにもあらず、いづれを向いても、たゞたゞ山の奥深きが見え透く、お登志は自ら茲は往に通た處よと思へど、亦然うてもなきやうの心もし。

今まで我を乘せてゐた車は、あれ〳〵我を置去にして、かまわず獨て斯う遠く行ッてしまい、我ばかし此きのしれぬ、此こわいやうな、それてゐて日影自らは樂しさうに映す此世界に唯一人居殘ッて、思はずお登志は、身振して後を向けば。

「如何かしたのと、母は心配さうに曰ふ。

車夫も驚きお登志の顔を見ぬ、まだ年は十八ばかり髪は黑く房々として島田に結び涼い目元の罪のなさ、口しまりぬ、身體は稍肉多の方にて、道中の暑さと車の疲とにてうち萎れたる姿、淑にして何處となく愛苦し、母はそが此方を向いて、いゝえと曰ふを見て、可愛さいや増り、いま一度幼くして抱いて而してあやしても見たき親心、今までの考の糸口も何處へかなくしてしまい、車の行々最愛の娘の後姿を打守り。

お登志はふと前齊の事を思ひ出せば、なつかしい伯母の姿がしみ〳〵寢物語に言はれしその優い言葉が、どれほど深く思つてくれるのか分らず、身はいつの間にか庭の葡萄棚の下に在りたり、美麗しい月の光は、棚一面に疊合へる葡萄の青葉をかき分けて、あいだに住めるその清らさ、それを伯母が椽側よりすかし見ながら、手を伸して見事なる葡萄の房を取てくれしが、其時お登志には伯母の外、世界も何も欲しからず、葡萄のその房よりはあゝわたしがその枝につる下ッて見たかつたと思へば、涼い風颯然鬢のほつれ毛をゆるがず、オヤ團扇で母上さまがと思へば車急に曲りぬ。

畠原に出てぬ。

背負籠をしよッて、片手に鐵瓶をさげて、一人の娘が途の端に車の通るを避けてありぬ、寂い廣々とせる、寂い畠なかを唯一人、何が樂いのか、何が不思議か頻とわけもなくお登志親子の容子を見上る、車は其前をゆつたりと通り穿けぬ。

枝豆の畝には短き葉影をそよがせて、風が稍吹く、其畝のなかには四十過の男が一人かゞんで見えしが、車の通るを轉た横目に見て、好し人間と生れし甲斐は茲にあるのか、茲は一番平生の力の容れ所か、ウント稜く、お登志はさはいへど寂い畠原に何も見あたらず、あれまだかと思ふうちに漸く佛小屋のあるを見つけぬ。

其前を經て坂を下れば傍の稷の畠より雀が車の來りしにあわてゝ數多一齊に飛立つ、お登志は急に蘇生りしやうなる顏して向ふを見る、竹籬の立續ける間々には土藏の壁の白くほの見えしなり、母も端然身を直して車の上やゝ反身になりずッと我居村を視渡す。

「母上さま、もう家ね。」

「やう〳〵來たね。」

車は茲に思ふやうに轉げて逸散に居村には入つて、我家の門の裡まで勢好く轉げ込で止れば、何か罵る聲して奥坐敷の方より噪い物音、お登志は車を下りやうとすれば弟の健二が親類の者やら下婢やら逐ひ立て引き立て轉げるやうにして來る、父も出て來ぬ。

「大層晩くなりました、伯母さんがなか〳〵歸さないものですから、健二お前、能う御留主が出來た、さ、伯母さんがくだすつたんだよと曰ひて、

母ははや車の傍に立てゐる健二に何か渡して着物のたごみを展べながら車を下りる。

稍あつて皆一同奥座敷の涼い方へ行けば、健二は姉の持歸りし大きなる竹の皮包を跡よりさげて來て、さも嬉さうに眺め。

「姉さん是は何、と曰ひて、

いそ〳〵其包を解いて見

「あら厭な姉さんだ、土なんぞ……

「あれいけないよ此人は……闌の鉢へ入れるのだわね。

父は覺えずにこりと笑ひて、ちよいと立て忍草を懸換へる。皆々可笑がる。時に慣々しい蜻蛉、何處よりか疊をすり掃ふやうにして飛到るに、健二見て輕う身を起しつ、軒端には樂く傳はる風清し。

第三

夕滿暮、お登志は一人裏門穿けて野畠のなかにありぬ、稍の豊に熟りたる、隣へ〳〵とうなだれ懸り、遥一段低ければ、半ば白う花を持ちし稻穂、お登志が身の丈よりも

高し、村の小娘は此時素足にて刈ためし夏草をば手に餘るほど抱きあたりに漾ふ夕影の美麗さを眺て〳〵……散らすやうなる歩をして、背負籠のある所へ運ぶそれより稍年若き男の値は落日に背向けて、草青々生へたる田の椽に腰掛けて、一心鎌を業ぐ、倒木を傳はり來る滴泉は其片足に觸れては、又ちよろ〳〵路傍を逃げゆく、涼風は何處よりすともなく、稻葉を動してお登志の湯上の肌身にさわりて、そよ〳〵野面を渡る、絶々に呼はる遠近の聲は幽に一になりて聞ゆるうちに、はるかひぐらしの鳴く聲、水車の音、犬の吠ゆる聲高くなり、見れば野にて何か燃す物の煙、何となく天を指し、高臺の森を洩れては程なく村寺の鐘、入合の空に通へり。

誰や呼ぶ。

お登志はふと後を見れば、母の手招するに。

「何にえ。

母は近く來りつ。

「何だね此子は、もう先刻から御酒になつて居らあね、さ早くお來な、村山さんも早ッきに御着きになッたよ、あれそんな事してゐる日ではあるまいがね……

「だッて……」

「好いやね、他の人じゃなし、お前の好な村山さんだもの、オヤ何が羞かしいの……」

早くいつて御挨拶なさいよ。

お登志はいやとも曰はず先へ立て、たゞ斯う何も氣のなささうに歩く、母は世にもやさしい聲にてお登志といひながら少し足早に走寄ッて、ちよいとお登志の釵を直す。

日はまだ入はてず、西の空何處ともなく、赤く朧になつて、野一面に映り、斯う酒にても酔たやうに森や篁までが見え、冷しい夕模樣母の樂さをばゆる〳〵と語るなり、二人は斯くして倉の處へ來れば家にはのゝめく笑聲。

お登志は立停り。

「新宅の叔父さんも來て。

「あゝ

第四

客の座敷は十二疊の廣間にて、而もお登志の爲め、二三日前新に疊を入換へ程好き處には炫きまで燭火を照し、其心切られては折々客の顏、お登志親子の顏、家傳の朱塗の平膳皿小鉢、異樣の光榮を放つ、床の間には大なる備前燒の花瓶に挿せる百合の花美麗に、お登志が高祖父の書きしといふ幅懸れり、其幅は一筆になぐりつけたるやうに瓢兮を横さまに活潑に書き墨痕飛動するばかりに左の文字ありき。

やれ〳〵お釜をうち起した
これ程嬉い事はなし
にくい藤太は打殺す
大分金をもらひはする
いざ〳〵歸りて酒買はむ
飲まぬうちから酔たとさ〳〵

右取於門翁句

八十八樂翁醉墨

座に並ぶは隣の八右門、助右門、其隣に縣書記の村山、他は十三人ばかり盡く家の所縁の者、新宅の三郎兵衛は今は村長の身の上、榮華に餘りて村山の次に座り張肩をして膝を荒しながら人の語尾について長う笑咳を引く、お登志も母の傍に座りあ

る程に飲ねながらぱッと顔の紅くなつたやうの氣になり、皆々此夜は酔も殊にまわりたり。

村山は八右門が辭退する杯をむりに注ぎ。

「明日は嬢の吉日だ、さ飲むべしさ、平生なら僕も四五杯が積だが……」

と曰ひては好い機嫌にて主婦の方を向き。

「御内儀大分過しました、お蔭さまで、オ、何もお禮もあるものか斯う御世話したのも嬢が氣に入ッたからさ、の、木島君、今夜こそは月住吉の神遊……あ、酔たとさ、オ、諸君どうじや、ちと陽氣に何か出さうじやないか。

「ハやりますべい。

「ハ、まア此家の新右門さんなどは幸福なこんだ、娘は今度東京の大學者にもらわれるし……ハ此家の樂隱居も甘い事を書いたものでごすな、此家では、ハ祝言事ッついふとすぐ此掛物を出しやすが、ハ、幸福なもんでがすな、是ハ……」

「裏の嬢には米が積である、可愛い娘は嫁に遣る。

「今に玉のやうな孫が出來るとさ。

「ハ出來るとさ。

此時急に膝を崩して、新宅の三郎兵衛は堪らず。

「ハ、とくわかに御萬歳。

といふに一座轉た動搖めけり。

お登志の笑聲はいつか表にしたりき、壁に移れる忠實なる影法師は漸々形しだらなく、座敷は全く開廣げたれば庭一面の光明さ、處々松の植木は遣水をあびたるが露のやうになりて枝葉に滴れたる、ちらつく灯影に小躍するかとも見ゆ、母のお豐はつと立て八右門に酌をしやうとすれば、お登志は又していつの間にか傍に端然健二と並てゐたりき。

村山は何の心か頻に掛物を見ながら。

「安心だ木島君最う安心だよ、嬢、維嬢と曰ふに……耻かしいと見えるの、明日は途中から汽車だぜ……嬢、維嬢は奥州の汽車が出來てから乘た事がないだろう、エ中禪寺に行く時に、エ中禪寺え汽車は行きますまい、オ、さう日光か。

母は遮りつ。

「が村山さん、此子ハどうも偏頗てすから、どうも心配になッていけませんの。

「何故。

「何故ッて貴君、變な物が好きなんてすもの、今夜なんぞ如此事曰ひたかありませんがね、まお聞きなさいまし、何よりお月さまが好きなんてすよ。

「お月さまえ。

母の斯くてかこつが如く、お登志の性來唯最愛するハ天上の月なりき、固よりお登志は未だ世に就ける憂きやつらしといふ事を知らざれば彼の婆娑たる清影が何の慰藉を與へ又何のあはれを催すかを覺えず、されど乳母が此世にありける頃、漸く腹間ふ健二をば横抱にして乳母が夜なお〳〵、登志を傍に置いては餘念もなう守謠を歌ひ。

お月はまだ何歳、十三七、まだ年や若い。
此子を生て彼子を生て、誰れに抱かしよ。
お滿に抱かしよ。

と曰はれし時は何となう月ほど好いものは無きやうに思はれ。

「何故お月さまは永遠も若いのと問へば。

乳母は笠やめしたる月の朧影にお登志の顔をば不審氣に透見たるのみ又も。

其油どうした。

黒どんの犬と白どんの犬と皆皆てしまッた。

と曰ふ時健二の啼くに起ッて椽側に足拍子を取ながら。

其犬どうした。

殺して其皮取て太鼓に張て

其方向けては般々々此方向けては般々〳〵

と歌ふ聲は靜けき庭邊に澄渡りけり。

家の今の主人も此乳母には三歳の春より生育られしと曰へり、或夜の事なりけり、お登志は同じ年なる近隣の娘と月の出を待つとて、茶袋を縫ひてありしが、縫へども〳〵待つ月は更にも出て來ず、夜も世も暗うなりにき、乳母は微暗き行燈の下に つく〳〵とお登志の顔を見つめて、ほろり涙をこぼし……いつ嬢さまのお子の守が出來る事かと曰ひしが、今は桔梗のきしるあたりにも、其聲だに絶えて聞え

ずいつもながらさゆるは晴夜の月ばかり。

健二も早や姉を屬るの年となりては黄昏などお登志も甚しく腹を立つる事のありしも、お登志は圓滿な月が杉の森を出離れて影の椽側にうつるを見れば、覺えず健二を呼て樂しう弟が空明に鵲の巣を指すを見たりき、其れよりお登志は父に書くといふ事を習ふに迫びつ、心あつて夕暮の空に其所渡る月を眺めて見れば樂しさ得も曰はれず、秋の夜など庭下駄を着けて靜々露を踏分け築山に上りし時は、弟の健二と共にのみ月の世界にあるやうなる思しつ、其懷次第に甚くなれるを見ては、父も月明に己が影を顧て覺へず慨ける事のあれり、されど其實全く月の樂きか將た月夜の好きかお登志は自ら得て知らざりき。

母はお登志の性の己が質には似もつかず斯るをば殊のほか氣にすれど、健二とお登志との間は年も甚だ隔りたれば、雙親半生の愛甚くお登志の上に鍾りつ、圓扇にて母は此時もお登志をあをりつゝ。

「空のれ月さまてすは、中禪寺に宿た時なんぞは、ほんまに驚きましたの、何だつて貴君、夜中にこつそり起出しましたから、びつくりしましたら、あきれるじやありませんか、月が出たつて云ふんてすよ、其翌朝だつて然うてすの、人のまだ眠てゐるのに障子を開けますから又如何したのかと思ひましたら……が村山さん其時はほんまに宜う御座いましたの、何ッて貴君頭を擧げると圓滿なお月が直ぐ水向の樹には入る處でしたよ。

父は半斜になりて軒端より空をかき探すやうにして。

「然う曰へば今夜はまだ月が出ないか知らむ。

十時が鳴れり、お豐は程なく客の去りし跡醉倒れし村山をばゆり起して寢間に入れ、また座敷にくれば、聲もあらずしよんぼり端居するは手傳の娘なり、夫は柱に靠れて横になつた儘、何ぞ健二と話して居るやうなりしが、きわどく笑ひて身をかわしながら、疲れて睡い眼にてじろりお登志を見る、お豐は燃下りし心を切らんとて燭臺の傍に寄れば、百合の花濃に匂へり。

健二は見上る天の色、月は未だに出てやらず。

「姉さん明日は大丈夫だ、星だらけだ。

「健二最うお休み、さ、お登志も勞草たろう、さ最う晩いよ。

翌朝、お登志が家の門よりは四輛の車、驛々村に響いていにき。

第五

此村にて新右門の家といへば誰か知らざらむ、先祖が五本の指、今は土藏となり幾多の田畑となり、出入の者の恭々しさ、四代の前にか建てられし長屋門、度々造變へられしが其昔ながらの白壁は次第に光を添へ、今の主人も始ば村の推撰に戸長を勤めたる事のあれども、數年以前よりは全く他に讓りつ、郵便にて不斷送り來る法律の講義錄、折々出しては見れど別に讀むにもあらず、肥太りたる其體二三年前よりか大慈にしたる其髮、却て閑に苦む事のあれば、得意の雪竹を蓄くに餘念もあらず庭前花自ら開いて自ら落ち門外世自ら移行きけり。

二人の子も自ら大きくなりけり。

數年の前なりき、村山が縣知事と巡廻に來て我家に宿りしよりは彼我互に親くなりて、日曜の前日などには彼折々來り宿れりき。

お登志は別に分家もやさせんと夫婦寢物語に相語りし事のあるを、或日村山が偶然來て先方の親といふは省の次官にて來月の初になれば縣のさる所へ巡檢に趣く筈、若し苦しからずば其以前に至急〳〵との媒話に、お豐は喜ぶ事大方ならず主人も急に其氣になれりし。

今朝しも主人新右門は深く寐れりき、新右門も流石にお登志が行末の幸福に就ては縞に揉みたりしかども思はぬ運にて其最愛のお登志を世にも立派なる玄關に上せたれば、眼から何か鱗のやうなる物が取れ、殊更巾身が廣くなつたやうの心持にて昨夜村に歸て來、是を平生なれば、まだ日の出ぬうちから座敷の雨戸を明始て家内を起すものが、天井をこッそり其睡てゐる上に啣して見ても心も附くまじと思ふやうに深くも寐入りたり、やう〳〵九時の時計のなる頃幻にて表の方に膳椀の音し障子の頻に開閉するを聞ては頭を擡ぐるやうなりしが、又何時しか眠りたり、お豐は片影のあるうちにとて新宅へ行きつ、朝の間ほんの過雨にて少くぬかるみたる路をば、又踏みて歸り來れば、新右門の寐間には猶も襖の立てゝあり、晴れてはのん氣なる田舍の夏日和、表を見れば出入の翁の入りて來る、姫百合の白い花をば根ごと土ごと鍬に結附け、しだらなくも肩にかついだり。

「御新樣、嬢さまは何處に居らつしやる。

お豊はその庭先には入りて來るを待ちつ。

「あゝお前まだ知らなかッたかね、然う急にね、不思議な縁て東京へ嫁に遣たの、お前何か用があるの。

「なァに今朝しがた山へ行きやしたらね、つから豪盛な百合がありやしたから嬢さまが喜ばッしやるだろうと思ッて持て參じたんてごすが、然うてごすか。

「ま、九二一吹お附な。

九二は鍬を啣して腰を縣ながら。

「ハ、然うてごすの、早いもんてごすな、ハ、嬢さまも……

と曰ひて稍ありて。

「家の孫めもねつから可愛くなりやした、爺が歸て行きやすとすぐ匍匐出して來やして、何か囀りやすからねッから、疾くはありましねい、最う爺等は此通足腰はろく〳〵にきかなくなるし、最う世には何も望みはありましねい、毎日〳〵塵埃染になッて……寐ても起ても同じやうな事ばかり毎日〳〵繰返して……ハ、最う何も望みはありましねいが、御新さま、斯うして歸て孫めの顏を見るのが何より樂てごすの……然うてごすか、江戸へは爺も行た事がありやすがハ、何處てごすの。

「何にね學者なんてすよ。

「ハ、學者てごすか、學者ても碌々てごすな、何ていやしたか忘れやしたが後て聞きやしたら餘ッ程偉らい學者ださうてごすが、野爺が茶屋に休て居やしたら、何處に行くッて横風に曰ひやすから……野爺も、ね、御新樣……野爺も人間だ、そんなに物識振らずとも好いと思ひやして、いづれ旦那方は幽暗い所にばッかり引込て居て野鍛みたやうに死ぬんてごつしやうが、ハ、何が一番樂いんてごすッて曰ひやしたら、ハ、毛唐人見たやうに煙ばかり吹きやして……ハ、返辭が出來ないんてごした。

「それは九二何處へ行く時え。

「何あに小袋が原さまへ參詣にいんだ時てごす、さうしたらね、御新樣、お前達は生れて來ない方が好いとは思はぬかッて尋ねやすから……ハ、……

ハと曰ひて更に力を入れ。

「孫めの顔を見るのが……ハ一番樂いッて云てやりました。

時に簾の影みは次第になくなり椽外に投出せし九二の草鞋先を離れたり、庭の處々の盆石に傍ふて開ける岩牡丹、まばゆい程照る夏日に互に美麗しい光を投返し、花蜂は何かうろ〳〵軒端に飛ぶ。

主人も漸く起きて來ぬ。

「ハ是は旦那さま今來しなに見てまいりやしたが、旦那ハ、今歳は此家の田は大變な出來でございますな。

「ム、然う先づ喜てくれい、九二、最う聞いたろうが、余も東京に四晩ばかり宿ッて昨夜戻ッた、どうも大分寒過した。

「嬢さまはどうでございます。

「夫婦仲も大分好いやうだから、先づ安心だ。

「だがね、九二、孫でも出來ない間は心配だよ。

「何あに御新さま、安心でございますとも、御新さまなんぞは安心でございますよ。

「然うさね、私なんぞは先づ安心の株さ。然う飲んだり食ッたりすることには何ぞ不自由はなし、何にも是が斯うと曰ふ心配なんぞは、ほん微塵程もありやしないがね……然し何だか心配があるよ。

九二は程なくいに去れり。

新右門は顔も洗はて庭に下り植木をいぢる、隣の犬は竹籬を隔てゝ頻に吠へぬ、勢好く外に遊ぶ聲したる健二が案内に、いきせき誰や入りて來し、投出すは村山よりの書狀にて、別に添ふるは東京よりの端書なり、其はがきには夫婦仲宜からずお登志は村山まで送返すべしやとなり。

第六

其れより三日の後なりき。

日も暮ぬ、健二は湯上の元氣に單衣の袖を通し〳〵何心もあらず奥の座敷の椽側に來てあれば、母は新宅へ行くと曰ひて出てし儘未に歸り來ず。

向の杉の森はあたりの薄暗い上にぼッたり……墨ををこぼし、あたり一面は其木蔭より微黑い影が押流れしやうなる宵闇、空を仰げば過雨にても來さうに雲騒き、其斷間〳〵には空きわどく蒼さめ、夏の夜ながら星の光何となく凄味を持つ、

されど健二は唯涼さに快く四下を見まわせば、隣の白い小犬の薄暗い間より尾を振り〳〵出來つ、庭の前を通り行うとする、健二は手を伸して呼止やうとすれば、小犬はちよいと健二を振顧りしが、たゞ振顧りしのみにて何かは自ら知らず……

何か探すやうにて薄暗い土藏の蔭より蔭に傳ッて、影のやうに姿消えぬ。

健二は椽側の曲角に來て柱につかまり又も喚返さうとして轉た口笛を鳴せば、にわかに玉作の松の後にて父の咳く聲座敷を誰か足音するは最う何處へも行かぬと曰はれし姉のお登志なり、健二は走行つて抱きついて姉に帶をしめてもらい、嬉い二十三夜の月を待ちにき。

隨筆類

杓子定規

如何に蜘蛛の卵を生み出すかを識らんが爲め數疋の親蜘蛛を捉へて實驗室の一隅に養ひ置き、更深くる頃、火影を吹き殺し、徐かに足音を盜みて其傍に近寄り今か〳〵と伺へば彼蜘蛛産氣づきては又やみ、やみては又産氣づき、かくて中々産み出さず、夜一夜、三夜、蜘蛛と暗がりの裡に睥み合ひしが、ついとろりと眼蓋合せたる間可惜卵を生み落されぬ、其翌朝いま〳〵しと思ひて實驗室を出づれば庭前の松が枝に結び附きたる熊蜂の巣見事に飛石のあたりに穴を通ぜる蟻の兵隊職工、其數總て幾千萬ならん、彼方なるはバーベルの塔かゝいて青空高く登りてみん

上下、古今、三千載。

アダムが沙捕り、エブが糸取れる其日よりの原生動物よりシエクスピーヤが生れトムソンが生れたる時代の其間、永きか短きか我等知らず、ナポレオンは死し、シーザルは死し、マホメットは死し、ペリクレスは死し、消えて殘れるものはなし、地の下

は僅か一寸入つてもいと〳〵靜けきに、アヽ、地上の騷々しさ。阿房宮も灰となり、アルマダは嵐に碎け、ヤレ龍動の大火事、ヤレ巴里のヲペラが底ぬけしたのと、美麗なる家屋は再び造り立てられ、又た打ち壞され、又復た造り立てられ、經濟上荒蕪の原野日々に堺を縮められ食物と人口とは平算的に進み行かず。西か東か此渾沌たる宇宙を透して只運命は放縱なる間に自然の天法―天則―を求めて移り行くと同時に、たゞ一つ永久不變の存在物あるなり

英に於ては之をヒヤーセーと云ひ、フホマテリーまたフホシユラといひレテニユーのと云ふ。佛に在ては獨に在ては我等知らず。我れに在ては杓子といひ定規と云ふ。

杓子は何ぞ人皆之れを知らむ。阿三之れにて飯を盛る。定規とは何ぞ大工最も先に之が必要を持ちしとか、今も大工これにて線を引く

而て杓子の杓子たり定規の定規たる所以、フホシユラたる所以、レテニユーたる所以は實に茲にあらず、看よ

試に日本の世界より盡く其住民を追ひ出し、而て其中より全國民を代表し得べき才物數人を撰擇し來ッて此國土に住はしめ、一人には之れに政治學の一斑を敎へ、一人には之れに法律學の通論を敎へ、其他の者共にも各其志に從て、文學醫學等の一斑を伺はしめよ。固より彼等其始めは眞面目に勉强するも、暫少しく暇なるに至れば次弟にテーブルの前には居堪ずやなりなむ。されど兎に角、彼等が學ぶ所の一斑を生呑するを機とし、さきに追ひ出せる同時代の民人をば盡く復た彼等の周圍に導き到れよ。

彼等は未だ二三のみか研究せざるなり否な學ばざるなり。されど彼等を取り圍むの人は皆悉迷、爭ふて彼等に問へり美とは何ぞ美の事は定めて深奥ならむも試に說き聞けよ。文學とは何ぞ、文學の事は定めて深奥ならむも試に說き聞けよ。法律とは何ぞ、醫學とは何ぞと。アヽ、彼等は茲に到て其未だ全く知らざる七八をも擧げて答へざるを得ざるなり。彼等は七八をも知らず、信せず、然れども彼等は十を知れりといふ。十を信ぜりと云ふなり。見よ

彼は今朝しも寢過ぎやしけむ、肺腑衝の條下をば讀てや來ざりし。されど彼は既に患者の手を取れり、彼豈に之を知らずと曰はむや。彼に肺腑衝の評說を語れり。

彼は細君を娶れり否な狐ッそり或る氷人の月下に依りて之を娶るべきを約せり。
佳期日あり、親達喜び舞へり。されど彼は耻かしと思ふ事ありとせば、彼は友達の詰
責に對して曰へり、何にのと愈問へば遂に曰へり、何にの……人を……と彼は
椽大の筆を揮はんと欲して、編輯局の机に向へり。何をか稿せん。何をか論せん。電氣
燈は限なく輝けり。時計は鳴れり。活字工は待てり。されど如何せむ才思は早や盡き
ぬ演舌の會にも出るを諾せり今の期に臨て如何せば椽大の筆や揮はれむ。アヽ才
思は早や盡きぬ、活字工は待つ、皆せざるを得ざるなり。アヽまづ出來あがれり。
彼は威儀を裝ひ、證據物件をばうず高く机上に積み、やをら優々と辯じ始めたり。第
何條には何々とあり、何々條令には何々とあり、何々は何々たらざる可らず、何々は
何々なりと是於に於てか、彼等は其杓子を以て雷に飯を盛るのみならず、總てを盛
らんと欲し、又た其定規を以て總てを定規せむと欲するなり。看よ
美文學者は熱心に其門樞より善の標札を取り去らんとし、宗教家は何んても之を
懸け置かんとし、ソクラテスはアナキサゴラスを罵り、ガリレオ地動說を擲たせら
れ、ヴオルテエルは宣誓の式を餘儀なくせられ、ユーゴーは佛文學を知らずとして

大學の諸先生には罵られぬ、アヽ教育は箱詰となりぬ。
人死、改葬、傷胎、產、觸失火所、五體不具、契猪鹿穴、六蓄產、吊喪、問病、到山作所、遭山七日法
事、等の制定まりぬ。然れども看よ
ユーゴーは實に佛文を知らざりしなり。カーライルは實にバクテリヤ及びマイク
ロープの事を知らざりしなり。然れども世には馬にして鈍馬ならざるの馬あり。彼
等は彈池たる社會の黑闇を透して群鉾の閃くを見、遙に嘶けり。
世には放縱なる野獅子あり。彼等は高き枝頭より其頂毛の上に落ちたる露滴をば
振ひ落して長き同時代の眠より覺め出てたり。而て杓子と定規とは彼等の足下に
踏み碎かれぬ。彼等の胸中豈に亦たコルネーユあらんや、チョサーあらんや。彼等は
實に他の國に從て胡蘆を畫けば先生に欣ばるゝを知らざるにあらず、然れども彼
等は實に之を欲せざるなり。彼等はオルトセラスの昔にありたるを識らざるにあ
らず。然れども彼等は今日のタコ入道を得て更らに大に滿足す。試に廣々として際
涯なき原野に出てゝ見よ、宙を吹く風吹くまゝ、星の火影は僅に數點のみ、空にきら
めき、まともに地を覆ふ黑帷、夜漠々、悲滅々、悲しきか將た喜ばしきか草木は身振ひ

せり、泣くのか笑ふのか烏は發聲せり、彼等は如何にして黑帷を拂ひ去るべきやを知らず、されど彼等は既にそのしの〳〵めの空なるを悟れり、彼等は思想に於ても物質に於ても業己に舊社會の安を覺れり、故に彼等は手を宇宙の外に振ひ、全然舊き形骸を去て活々潑々たる新聲を九皐に達せしめむとせり、是に於てか彼等は書けり、歌へり、泣けり、怒れり、自然と自由との間にぶらさがれり、而してユーゴーは佛文の新紀元を創し、カーライルは英文の別頭地を放出せり、彼豈に佛文を知らむや、彼豈英文を識らむや、ア、思へばユーゴーの前には佛文なく、カーライルの前には英文なかりしなり。

一日、吾人々類相伴ふて古本屋の前を過ぐ、見れば塵だらけなる見すぼらしき數多の本ども破れ籠の裡にあり而して價はえり取り金一錢五厘なりき、偶其中より、モー、キシウ、といへるを見附けぬ、其書の裡にはラシイヌ以下の文豪皆其間逢ふたる文法を直されてあり、ルーソー其魁なりき、吾人再び之れを破れ籠の裡に投じ相顧みて笑て曰く古典屋先生は宜しく紙屑籠の宇宙に威張り居るべしと、ア、實に然らずや。

天下の杓子定規は本居宣長より過るはなし、古になき假事、ふるき歌なぞ讀みて辨ふべしとは是れ杓子定規世界の憲法なり、何でも見た事のない長歌は感心が出來兼る、今少し日本文を學だならコンナ事はかくまいに、今少し漢文を稽古したらコンナ文字は使ふまいにどうも文體が雜駁だ、古法にかなはん、文句や熟字が澤山ある實に今のものはこまりきると曰ふ、ア、天下の杓子定規は古典屋先生と固着して離るゝ事なく、而て實に本居宣長に過ぐるなきなり、軒傾き窓破れ席は蓆を敷べたる裏長屋にはヒューマンビングの住ふなり、彼等の世界には曾て一卷の書冊も持て運ばるゝ事なく、高尚なる智識の聲も曾て聞へ響きし事なく、彼等はたゞ感情に依て動くを知るのみ、夜叉の色、畜獸の心、葬禮のある寺院に入つては施飯を乞ひ、橋の欄干に月見る人の袖にすがりては憐を求め、定まれる家なく定まれる夫なく、甲家の亭主留守なれば其妻は即ち乙家の獨夫に見へ、はては黃昏の頃、煤けたる土瓶の湯がブツ〳〵沸き出す途端に夫妻相罵るは果して何故ぞ、隣迄壁を叩て相爭ふは果して何事ぞ偶々幸運の事ありて異常の貨銀を得るあれば其貨銀は夜來一杯の酒量を增すを得て珍らしく主翁が妻子らに人間らしき顏付を見するに過ぎ

ず。職工同盟を結べは資本家に與みして之れを非難するの經濟學者あり。甚しきは彼等は社會の劣者なるが故に自滅に歸するを以て經濟學の主說と說くものあり。成程、富むものは益々富み貧しきは益々貧しきはこれ社會の事實なり。此間に立て貴族主義だの平民主義だのとて譯のわからぬ主義を唱ふる者は決してある可からず。然れどもこれ分りきつたる一應の推論に過ぎず。[illegible]

羅馬社會に於て經濟上の變動甚しく、ゆられゆらるゝに當て最も困難に重荷を負ひしは中等民族にてありき。かくて中等民人は漸々衰弱し上等民族と奴隸との兩極端が增大したりしは之れ實際の歷史なり。今日以後と雖も此の社會は最富者と最貧者との兩極に近づくべきは夫れ或は事實ならむ。然れどもこれ分りきつたる一應の推論に過ぎず。[illegible]

正無窮が負無窮に歸すこれ數學上の理實なり所有の財產に若干の負債を加ふれば總身代の上に減額を生ず。然れどもこれ分りきつたる一應の推論に過ぎず。[illegible]

想へば人は此分りきつたる推論を知らんが爲めには學校には入り學者にはたづね、洋行はしたがり博士とはなりたがるなり。然れども宇宙の獨り子上田乙麿歎じて曰へり……ア、牛！牧牛兒！何丈の相違があるのだらう併し無垢な者だあんな無垢な者を亡に送るのは畢竟誰の罪だろう。社會か社會の手は彼の上に屆かぬのだ。自然淘汰か彼は固より劣者だ。高等な知識の遺傳もない。財產もない。夫故彼は住所の競爭に打負けて、食物の競爭に打負けて、敵味方の關係ある競爭に打負けて寧ろ牢獄にても投げ込まれて、少しも早く倒れるのが本分か。しかし若も其の劣者が余の親戚であつたら、余の兄弟姉妹であつたらどうだらう好しや骨肉の愛を捨てられるにした所が、余自身であつたら如何だらう余は倒るゝなら寧ろ人を倒しても好い。國家！國家がなんだ。賄賂！持て來い受てやる。ア、此心は全く破れたるの心なり、而して此破れたる心は今や社會下層のヒューマンビングの方寸中に潛勃たらんとす。蓋吾人は地球を離れて立つ事克はず。

吾人は齊しく地球を踏めり、而して吾人は安如なり、然れども試に地球を切斷して九原の下を見れば火山脈は四方に流通せり。想へは此の火山脈は吾人の足下に、吾人の床下に火焰を吐きをるなり。快哉快哉地震は折々我地球を震へり。貴族彼れ何者ぞ、富豪彼れ何者ぞ、博士彼れ何者ぞ、春風に誘ひ出されて花下に顚倒せる遊客彼

れ何者ぞ。心輕ければ、身輕く、身輕ければ黑塗の車輕く、座はクワ〻〻と立ち上れど慣なるヒューマービングは卿等の四圍に心破れ居るを知らざるか、凶顏火を吹き、肉燃へ、血沸き、怒りつ、泣きつ、叫ひつ、罵りつ、社會の下層には實に寒心すべきもの夫れ多々なり。經濟學者、其れ第二の勞銀基金說を擲たずんば職工同盟は今に躍て卿等が頭足を寸斷せむか

時事翁の拜金論之を少年の理想に燒き付けるはよし、然れども此は其門に限るべし。善の鍵を美文學の門樞より取り去るはよし、されど世界は獨り美文學の世界にあらず亦た宗敎の世界なり、亦た哲學の世界なり、豈獨り定規ニュトン派の世界ならんや、此の世界は亦たルーソーの世界なり、亦たカーライルの世界なり。美を說く者は之を說け、善を唱ふるものは之れを唱へよ。而て大に之を說き且つ唱へよ、衝突は活世界の美觀なり。衝突の焰はよく杓子定規を燒き盡くすの力あり。寄語す。哲理を談する者は幸に杓子定規を懷て喋々する勿れ。文學を談するものは幸に杓子定規を懷て喋々する勿れ。而て幸に彼の貧者に一卷の書冊を與へよ

美麗しき足

人誰か繫累なかるべき、イエスの槽に臥せるは布子に裹みてその之を裹に置く手のありしなり、長じてエルサレムの宮に入れば人の鳩を賣るあり、街衢に立てば人の瓦礫を投ずるあり、宿世の繫累例へば兄と弟との情誼の如き、現在の繫累は人生の行途に橫はる障害の如き、凡そ千樣の形を取れる繫累をば一々排却し盡さんとすれば繫累は新陳我身に纏綿し來て永久離るゝことあらざるべし、誠に思ふきのふ都にて見し月、けふは片田舍の山合に出るを見ればとて若しも我が家に歸り來りし者ならんには其月が我に何の繫累あるかを思ふ事能はざらん、されど世に就ける凡ての望破れて斯くてあらん人は是も其生命なるを歎ぜり、何等かの使命を負ふて此土に生存し此天を仰ぐの吾人人類、幾度か花の開き花の落るを見、勝利と失敗とに我れ取亂して我が生命の茲に流れ行に從ひ、その境遇の變轉するに應じて何物か我が繫累ならざるべき、何處に適くとしてか能く得て之を免れべき、蓋繫累の人に到る何ぞ嘗て限あらん、然れども之を要するに內と外とのみ、外なる

は種々境遇の變轉を以て到り、内なるは余思ふことあらんとするに余をして更に余が思ふよりは以上を思ふこと能はざる心狀を以て余を限る、而して内外の繫累の余を限る所は是余が運命なり、既に稱して運命といふ、繫累の如何ともすべからざるや吾れ人共に先づ之を思ふ人生の無情なる余それ遂に繫累に死すべきか、然れども思ふ、余いま是より以上を思ふことあらんとして能はざるは余が運命是だけと思ふことにあるなり、而して明日更に是れより以上を思ふことのあるは好いかな亦た命なり、余胡爲ぞ彼の大智の者を羨むべき、今日雪を侵して馬をアルプスの山に鞭ち、明日は星を仰てセントヘレナの島に臥するとも、命や余喜て余が生を觀ぜん、命と余とは一なり、余が思ふ所は余が運命のある所、余が動く所は余が運命の宜き所、茲に彼の大化に乘じて我が生命の流水と共に流れの清きを喜ぶ、骨肉の情誼、隣保の毀譽、人生の得失我に於て何ぞ遂に繫累ならん、凡て見ゆる所の者は願くは擲て土の如くならん、人情の爲には、社會の爲には、正義の爲には如何ぞ樂て一身を忘れて、獻身することの能はざるべき、あゝ物と我と皆共に永く自由に歸す」井を堀れば茲に水の出るあり、悠々たる人世榻を葡萄棚の下に移して夏の夕月の影の青葉に涼き露の在所を示すを見、天の星の限もあらず美麗しくそれ輝くを見、其時々も五人三人榻を對して、ヘブリウにては風といふ字と聖靈といふ字との同じかりしを思ふ、此時余が心は宇宙の極めて善なる所にあり、誰か敢て之を夢といふべき、或は密に一室を閉じて凡を深きを考へ、或は車を避け馬を避けては市に奔馳するもあゝ又余が務、命と余とは願くは猶ほ永く一ならん、余は余が命を信ず、金星の若し太陽と相觸れなば、好し余が前にしも落ち來れ

新春

彼の鉤瓶を擧げて掴み取られし清らの水は、たゞ故もなく、蚤所の隅の甕に畜へら、る、父人それ、ユダ、の鍋も亦た神聖なるを得べきを知るか、母人それ飢へ渴くが如くに深くも慕ふ所のものあるか、

蓋、人は各其使命のあるあり、若し樂んで能く之を終ふるに足れば洵に小山がられしく手を叩き荒野が美麗しう花滿るを知らん、而してその使命を感ずるの淺きや、凡て臺所の天井は殊に重う下垂して人を壓せんとするものゝ如く、物皆すゝ氣に

煙りて轉たうちしめりあたりは黯憺として何處にも更に光榮の潛むを覺えず、知らず果して何の時にか、「ユダ」の鍋の神聖に數へらるゝを見るべき、然れども思へよや、人生無限の寶曆は、「ユダ」の鍋が神聖に數へらるゝ年より開き、而して此年の到るは實に臺所の隅に射れる一閃の光明よりするを、思ふに母人それ能く此意を知るか、父人亦た此意を知るか

固より母人の使命は極めて幽獨の境に存する事あり、經營慘憺暗涙屢ひせず、父人或は之を知らざらむ、親戚故舊或は凡て之を知らざらむ、然れども歎ずるを止めよ母人に於ける天の使命は實に此に在て存す、況や暗中惡を倒すの寶刀は一に托して母人の手に在るをや

家父の振上げし鐵槌は一打、未だ他の頭を破るに至らず、春はたゞ梅花と共に到れり、然れども人生の寶曆は實に未だ開けず、母人願くは見捨てられたる野の花の美麗しき光榮を衣よ、諸人それ此意を知れよ

葡萄亂

第一　夏曉

試に格段に之を曰はんか、夏の安息日の朝まだきに、深き夜半の睡より覺めて、窓の外なる景物の生々として快よげなるに座しては得も居られず、徐に笻を曳て町家を出はづれつ、朝霧の淡く放れゆくが儘、新なる空氣の觸動くが儘、路の傍の夏草に置く朝露の樂しきが儘、蛛蜘が兩側の小松より小松に往來を越て糸を張渡したる間に入りては又小河の流れが愛らしき速さをもて走る所に到りつ、又後より雲雀が遠韵ある自然の天樂を奏しつゝ最上處に向ひて躍りゆくが儘、歸るともなく復た來し路に戻れば、宇宙はげにも繪畫と彫刻畫のみを以つて滿てる所にはあらずや、況や再び笻を町家に引き到れば、紛々たる紅塵萬丈の裡にも、自ら其衣を途に引き若くは樹枝を伐りて衢に敷きつ、驢馬の子に乘れる爾が柔和の主を尋ねつゝ或る建物の内に入る人々あるをや、謂ふに此建物―即ち會堂とやいふ建物は或る人々の唱ふる如く、寧ろ毀つて之を牢獄と相代ふべきものか、蓋彼の「クエーカ」及び「ビ

ユリタシス」の徒が幾代々住み慣れし本國の土を離れても、猶且滄溟を渡りて新山川を求め、而して其間に建設せんと企てし一大祈願はたゞ此憐れなる一個の會堂をば自由に空に聳かさしめんとせるにてやありしなり、而して此會堂といふ建物は今に益々其數を增し、建てられては又燒かれ、燒かれ毀たれては又造建てられ無限の空間を通じて安息日の來る毎には、其裡より洩れてぞ出る讃美の聲高き

第二　何をか會堂といふ

プリマウスの會堂といへば人も知りてむ、頑たる彼鐵柵に傍へる數株の樹木、春を望ては常に欣々榮に向ひ、堂宇甚だ麗ならざりしと雖、其傍には身極て苦きも而も此會堂の爲に其心永く溫穩を保ちし寡婦ありて住し、其堂屋より洩出る眞摯の聲が聯邦の外にまで聞渡りし時に當てや、好箇のピーチョル君は泰然健馬に跨て靜々其門に入れりき

而して彼、使徒の講壇に向て徐に歩を進むるに迫ては彼會堂を以て何と思ひしや、恩愛溢るゝ母親が年うら若き愛兒と後馳に入り來り、望に充ち光に盈てる諸生が椅子を隔てゝ端然腰打懸け、老たるが幼きがにこやかに顏を相打守るを見ては、彼の心全く眞の父母の前に、兄弟の前に、姉妹の前に出ゝてありしなり、洵に彼會堂に入る時には快よけなる夏日影常に其心にうつろい、彼が心甚だ樂しむと曰へりき、然れども彼又謂らく余が唯一の職任は說教に在れば親しく會堂の人々と能くは相知るをや得ざりし、保羅、亦豈然らざりしやと、思ふにピーチョルの此言其れ不可なきか、縱令不可なきも吾人は深く之を考へざるを得ず、蓋是に因て之を觀ればピーチョルは未だ嘗て會堂の何たるべきを考へし事あらざりしなり、然れども今會堂の何たるべきかを考へんと欲せば彼の此言亦大に參考せざるを得ず

蓋嘗て之を思ふ、道は語に由て其存在を示す、故に道を明にせんと欲せば必ず有聲若くは有形の語を藉らざる可からず、有聲の語とは言語是なり、有形の語とは文字是なり、有形の語は茲に曰はず、有聲の語には甚だ長舌の語あり、之を辯說といふ若し語を出す事の難易以て勞力と否との區別を爲すを得べくんば、辯說は勞力にして談話は然らじ、且談話は多く逸豫の場合に用ゐられ、事稍分疎に渡れば則辯說の形を取る、固より二者分別の計界線、他原因と同じく畫として之を導くを得ず、然れども兩々相黑白なるは吾人自ら其理解あるべし

而してピーチョルの言は其意を追推せば、前半は會堂を以て談話の場と感喜し、後半は己が辯說の所とも心推せり、言を換て曰へば前半は以て安息の場と爲し後半は以て勞力の所と爲せり、故に前半は甚だ樂しきが如く、後半は甚だ苦しきが如し。而して前半は其感直覺より來り、後半は其念虛想より來れり

謂ふに斯道宣傳の事、古來之を以て獨り彼の辯說の邊に於てのみ聲ありとするも、の〻如し、甚しきは傳道を以てし、而も說教を以てにはあらず、一種の技術とさへ爲すものあるに至れり、然れどもキリストの其徒弟を世につかはし給ふに當りて何の敎ありしか、キリストの德威ある者の如く語り給ひしは則ち修辭者の如く語り給へるなりしか、海を渡りつ〻山を登りつ〻其弟子を顧て語り給ひし言々は極て眞摯なる宣傳の語にはあらざりしが、蓋眞摯なりき、故に至大至剛なりき、蓋又眞摯なりき、故に自然其節千古に調ふ、

抑々又彼の舊教の高僧が斯道を懷て絕海の孤島に宣傳するや、彼は甚だ辯說を厭へり、彼は唯磯打つ荒波が澎湃轟轟たるを聞て人の聲が甚だ小なるを語れり、而して其寺院に入れば、安息日には彼は只群小家族と眞摯に祈るのみ、好し舊教の寺院の或る面は甚だ難ずべきありとするも、彼の長舌なるものなきの一點に於ては、余は甚だ之を感歎す、殊に「ポール、ワイヤル」の寺院の如きに至ては、余は常に其一隅を借りて高臥せんと欲す

蓋會堂はピーチョル其人のみが辯說の場にあらず又凡てが勞力の所にもあらず、聖經に曰く、是此我家は祈念の家なりと、我家とは吾々の聖靈が自然に安慰を得る所、ピーチョルの直覺せるは實なりき、其虛想は妄なりき、

天下のピーチョル其人よ、六日の間其勉强室に在て書冊より書冊に懷を聘せ、妙想を以て宇宙の外に充溢せしめ、地の深き、天の高き、若其間の消息を得るあれば願くは會堂に入て眞摯に之を談話せよ、唯談話せよ、眞摯の言は必ずぞ其節調ふ、若夫他の結婚式に、晩餐會に、追善會に、六日の時をば全く奪はれたらんには、願くは眠けき眼を摩りながら勉て其辯說を爲す勿れ、抑々眞摯は彼の長舌なるものを惡む

第三　安息

太初に晝あり又夜ありき

而して今猶之ありつ、晝には凡そ物の動靜く現はれ、夜には其靜定まる、看ずや、吾々

が世界には一新事件の起る毎に、吾々の同胞は樣々に噪ぎ立ち、賀しつ、恨みつ、怒りつ互に僻合者の下るを見て欣然手を握るかと見れば、所中更に鉄拳を飛しつ、大勢寄つて懸つて大象も及ばじと思ふ運動爲せば、一疋の混虫だも力餘るべき事をば爲し能はず、紛々囂々、世界の大鍋の裡に牛肉も卵も、菜根も、同時に煮え立つ間に、那翁は死し、シーザルは死し、マホメットは死し、コロンウエルが一回二回、劇しく鳴せる靴音に兵士は議場に入り亂れて、扨も國會の入口に貸家の張札が出し後は物の音、如何に靜なりしぞ、五次ユダヤ人に四十に一を減じたる鞭を受け、一次石にて擊たれ、三次破船に逢ひ、一度夜海に在り、又しば〳〵旅路を經、且河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、城裏難、野の中の難、海中の難、僞の兄弟の中の難に逢ひ、樣々苦勞せし使徒ポーロも今は永遠の平和に入れり、吾人又河の流の上に畫ける文字の固より以て頼むに足らざるを知る、吾人は永遠の平和に入らんが爲め不朽の事業に向て勞力せざるを得ず、或人の曰ふ如く實に勞力は人の命なり、勞力の心内最深き所より天與の力現れ出て萬能の神に根す神聖なる生命の實擧るなり、人苟も能く此勞力を始むれば、其靈府より呼覺まされて凡そ高貴なる域に導き到らるべし、然れ

ども今夫野の作物夏の曉に生々しき綠を示すは、夜來星光微に涼風少しく加はるの間に於て滴、一滴天露の下れるに由らずんばあらず、彼の右手に鎌を持し野邊の暑さに甚た勇氣ある人、其人も綠樹陰下一味の涼風には横さまに身體を張り擴げて勇士の最後を愛せり、加之人生の行路は甚た難多きを以て吾人は勞溫柔の鄕を求めて時に安臥し以て前途永遠の平和を夢見ざるを得ず、蓋吾々の世界は吾々が神聖に勞力すべき場所なり、然れども吾々には又吾々の生命が神聖なる遁所あるを要す、否全く之ありつ好い哉、ドライデンは之を家庭と稱せりき

蓋家庭の樂みは言ふべからず殊に天外萬里漂遊の旅客が右に王國の倒るゝを見、左に其興るを見、薄暮客舍に投じて身體を投げ渡せる安樂椅子と其前なる暖爐との外には廣き世界の其間、他又一人の親しむべきものなきを覺ゆる時は、家庭の樂み更に言ふべからざるの追念を與ふべきなり、意ふに家庭に在ては余世途に疲れて茫然庭の面を眺むる時にも我愛子は玉作の松の後より愛度氣なき顏を伸して不審氣に余を見詰めつ、我最愛なる妻は余が爲めに潛なる室に入りて平安を祈りつつ、我慈愛なる父上母上は恩愛溢るゝばかりに余を慰めつ、余を勵ましつ、余は我

家人と相對して何をも語るべきものなき時にも、余は一花一竹、不言の間に何物をか語り居るなり、若夫榻に對して斜に夕日の影に照されながら疎未の晩餐を共にし、語るに物なく、打見るに皆默する所、却て千萬無量の愛は溢れ〳〵て軒端も樂みや、笑ふらむ

之を要するに家庭には總じて和樂の住するを必とす、和樂あるが故に慰藉あり風勵あるものとす、而して此慰と風勵との所有主なる家人は互に相結托して一の家庭を形造らんと合從せるにはあらずや、余が尊族親にもせも、卑族親若くは傍系親にもせよ、余と家庭との間に於ては各々其關係ある所のものは偶成のみ、換言せば余は既に隅成事件によりて我家人と合從し來るべき日に於て、益々合從し行かんとするなり

然れども余は曾に余が母のみならず、余は妻の爲めも姉妹の爲めにも帝と戰爭と擲て顧みざらんとす、而して斯く家庭の間に合從の傾あるは名譽も戰爭も之を變ずる事能はず、他亦何物も來て此合從を强ゆる能はざらむ、且夫家庭に在ては風常に己がまゝに吹き、暖爐の邊、窓牖の間、自ら和樂の天眞を留めて人の安息を促す、乃ち曉より午に渡つて戸々の見世開かれ、門推され、車走り、馬飛び、市聲甚だ囂々たるもの、纔に家庭の間に入れば、則ち三更人定まつて狡鼠亦音なく宇宙は深みも深き安息に歸す、彼の清教徒が新世界に巨大の足跡を殘せる絶世の勞力も、蓋此安息なる家庭の一隅に各々團欒して、我神に祈り以て養出せるものなり、故に今面倒なる論理學者ありて家庭の賜は(目的也)何處にありやを問はゞ、余は只安息と答へんのみ

然るに今會堂は前に曰へりし如く祈念の家なれば、換言せば無窮に馳せ去らんとする吾々の生命が天上の福音を尋ねて相集り、喜悅を以て相共に我神に謝し、憂愁を以て相與に我神に言ふ所なれば、家庭と會堂との間には更に他の相異の點あるべからず、故に會堂も又安息を以て目的とす、市の公共事務は宜しく市に入て其勞を加ふべし、町村の境界問題は宜しく町村の參事會に入て之を決すべし、凡そ二を得んとならば一に一をこそ加ふべけれ

安息なる哉、安息なる哉、蓋此安息の外には斷じて會堂の目的とてあるべからず、既に安息あり故に善に移るの力あり、既に善に移るの力あり故に美なり、假令安息の

世界の或洞穴には多く遊隋の動物を生ずとも、余は謹て會堂に於ける安息の賜を感じ且謝す

然れども彼の或規約の下に於て、長老とや執事とやいふものありつ、會堂の間にも刀筆的の勞力行はるを得ると思ふは、是極て妄なり、蓋是其勞力が會堂と表榜せる建物の裡に於て行はるるが故に然かく誤られ易きのみ、然れとも記せよ會堂とは唯其れ吾々の生命が神聖なる道所なるをや、第二の家庭なるをや

第四　硫化鐵

讀殘の書冊が開けたるまゝ亂雜に疊合へる勉强室は、晩餐の室と同じ屋根瓦に雨露を凌がれて彼是相隣り、或は階子段を以て相隔てらるる事さへあらざるを得べし、然れども勉强室は勉强室にして、晩餐室は晩餐室なり

之を要するに家庭といふ想は一家の間に於ける安樂の樂園をのみ抽象せるものなり、故に同じく是れ一家の間と雖主翁が或隱謀を案じつゝ頻と二階の階子段を昇り降りし、若くは主婦が其臺所の經濟を料理するは、全然家庭の事にはあらず、而して家人相與に暖爐の傍に團欒し、家母が安樂椅子に靠れながらに動すインスピレーションは是一に家庭たり、蓋此區別は吾人深く之を思はざるべからず、扨ぞ硫化鐵

第五　再び會堂

是を以て此を言へば、撰擧の爭にてもせましき身裝にて說教臺の前に立ちつ、鹿爪らしく星卜者もどきに空を仰ぎつ容宜しく辯流るゝ處、前にはアダムの子孫とエバの子孫とが數多頭を下げて雜り座し、法祖談止めば乃第幾番の讃美を案じて齊しく之を歌ひ聲妙に音樂奏商しと雖も、之れを會堂とは曰ふ可からず、要するに或は裏の小河に鍬と手足とを洗ふて徐に入り來り、或は投票函に記名投票して歸來り、或は長き隊商の旅路より、若くは戰場より戻り來り、今にも針仕事の手を止め若くは應接室より出て來れると相見て一笑、情眞に心安き所、乃ち種々の思に沈める幼き若くは老た兄姉妹弟か同じ望を得且同じ安慰を得る所、之を會堂をは曰ふなり、故に會堂の間には安息の問題あつて努力の問題なく、無形の問題あつて有形の問題あるなし

然れども或人々の解する處は全然之と異れりき、蓋國議會の正門と相向ふて茲に

一大堂宇を建てよ、其塔は尖に其觀は美に內は乃ち宏にして春申君が客諸共に入り來るに足れよ、而して堂の中央には嚴に高壇を形造り其傍には價貴き樂器を安じ、且其全面には幾脚ともなく規則正しく塗立の長椅子を安排し置き、凡そ日滿ち時來れば一分をも一秒をも曾て誤る事なく、稠人席定まるべく法祖壇に上るべく、其講の始る前には一若くは二個の溫容の人をして徐に場の中央を橫ぎり時に竊める靴音を立てしめよ、懇意の新聞紙上には折々雜報子に囑して其盛を鳴らさしめ、門には高く標榜し墨鴉願くは躍て班たれ、若夫不時の變、天下山稷れば直に喇叭を吹て義捐の金を集め、海翻れば忽ち電音を激して其狀を問ひ、其他慈善の會、音樂の集、徒に人の指目を恐れて孰れも未練あるべからず、要するに凡そ來て此堂宇に屬するものは皆無爲にあるべからず、眼あるものは必ず之をきよろつかせよ、鼻あるものは之を動かせよ、時計あるものは必ず其金鎖を輝かせよ、蓋斯くて好く禮拜の典を擧げ敎理の則を奉じ、若夫他の窮を聞けば爭て之を賑はし、人々甚だ忙はしき所、甚だ周施に熱する所、甚だ應酬に巧なる所、人は之を文明の會堂とや呼ぶ

是然しながら歐米に於ける會堂の衣服半は破れたるがまゝ舶載し來れるに過ぎず、嗟斯れば痛刺一番世亦恐くはヴォルテール出てなむ、最も斯くの如くに解し去れる會堂は論者の自ら誇稱する如く洵に靑菜に鹽ならず然れども別言せば此の如き會堂はローズウォーター的の人々が神聖の名を籍りて機械的に或氣風を作らんため或政體の下に結合せる所、是に於てか其生命全く去り其神聖全く亡し、俗氣甚た紛

第六　萬身人

獨り會堂の間のみならず他の團體に在ても周施屋はいとも身輕に飛揚せり、乃ち試に投票函の開くる時門前轔として車を走らす者あるを見る周施屋なり、街衢地傾き石出る所立て其狀を查察するものあるを見る周施屋なり、曰く慈善會、曰く市町村會、曰く「デン、アンド、ウォーター」世上紛々として周施屋亦多い哉

然れども彼等は同一の鼻を動ごめかせり、彼等は曾て書冊の堆くなれるが間に於て靜に沈思したる事なければ深更人定まれるが後には絕て臥戶の外に顏を出して無限の月影に其額を撫てられし事なし、而して彼等は好て人生の最も喫緊なる所を求めて徘徊し、時に或は漏長くるまで外に在て漸く家に戻り來る事あるも、枕

邊靜に横になれば眼は早やまどろまんとしながら頭には猶馬走り車飛び市聲殊に賑はしきなり、思ふに彼等の懐抱する所は其れ如何

今其狀貌を見るに、彼等は恰も時恰の洋服をば品やかに着做し、胸のあたりには稍桃色絹のハンカチーフを出し、遠くより人を見ての挨拶笑やかにていともかいく〳〵し、若も夏の日ならんには照る日影さまで暑さの堪へがたきにはあらずとも先づ上衣の釦子を脱して襟飾の聊か異あるを示す、金若くはアルミニユームの鎖緒時に夕日に射られてきらめくは時計の深く藏れてあればならむ、而して諸人の集る所には人々の尤も嚴かに靜まれる時を撰で立ちつ、或者の席に到りてしめやかに相語り、或は門前急に車をきしらせて何處にか消え去る

然れども彼等の大抵は亦敢て一身を忘れて能く周施す、蓋彼主の肉を炙らん爲め鐵網の裡に入て火上に之を動すの小狗は轉輾其主の爲にし寸毫も己が口腹を思ふ事なし、而して肉遂に爛熟せば小狗は直て一に之を其主の用に任するのみ、彼等の大抵は此小狗よりも更に優に一身を忘れて能く周施す、且彼等は最も機智に長ぜり

試に彼等を軍隊に入れて其宗教を言ひ顯はさしめんか、茲に一の大王、千里の野に出て〻親しく其兵武を檢閲す、護國の大旗施肅として空に渡り、大將以下の將校皆盛に軍裝し嚴として馬を控へ、列々命を待て相樹立するの兵士は凡そ其數を知らず、場齣に儀壯に太陽上に在り、既にして嗽叭一聲人馬益々肅として大王動く、ソロモン全盛の裝、ナポレオン絶世の勇、大王進て一兵士の前に到る、彼昨は偶劍身を典して今は唯其鞘を存するのみ、抜て以て大王に示すべきなし、王怒る傍らの一卒を直に斬て以て軍中に唱へしむ、兵卒亦固より劍身を有せず、然れども彼の信仰甚だ強從容王に謂つて曰ふ、大王の命は謹て之を聞けり、然るに彼の臣と王に於ける齋しく固是同胞の兄弟、今臣其肉體を寸斷せんとするに當り豈彼が聖靈の爲に一言の以て我神に乞ふ所なくして可ならんや、願くは王幸に臣の祈る所を聞けと、王之を容す彼乃ち聲を勵まして祈る滿場皆頭を低る、祈止て王頭を擧ぐれば彼既に劍を抜て其光鋩千里の外に閃めけり、而して其傍の一卒は全く劍身を失へりき其機智蓋此の如し

要するに彼等は一身を以て萬身とし八面玲瓏宛轉玉の如し、狂飈吹けるか直に他

の家に到て其雛の如何に覆れるやを見舞ひ、萬里人歸るか直に波止場に立て其船の如何に安全に入り來るかを望み、心常に噪立ち身常に忙はしく彼等は萬事を周施し又周施す

第七　杓子定規

且夫彼萬身の人は始て之に接するに甚だ愛況あり言笑頗る人に適ふ、然るに其想の因て動く所を見れは、彼等には唯一の杓子定規ありて一身をば萬樣に動かすに過ぎず、故に又之を失ふを思はず彼等の事業は洵に紛として其れ多しと雖只同一調子、宗教の法衣を以て一鼠をだも分娩せざるの大山を掩ふ、彼等豈眷て明月の夜一身の孤影を顧て其れ一笑せんや

然れども杓子定規は廣く天下に愛好せられし事久し、固より彼萬身の人に就て之を議するは愚のみ、余は宗教の世界に於ても文學の世界に於ても其他何の世界に於ても杓子定規の早く朽廢に歸するを願ふや久し

蓋し杓子定規の愛好せらるゝ所には宇宙萬物皆杓子を以て盛るべく、定規を以て測るべく、萬馬齊しく同一の速度を以て走り千軍與に同一の步武を以て動く、故に曉を待て男にもあれ、女にもあれ、小兒にもあれ、總じて手腕を有し又靈魂を有するものは盡く起き出ると雖、凡そ空漠に廣大に無邊に而も遠韵ある聲噪は地上又聞くべくもあらず、無限の衢一を眺めて國家先生獨り得意の聲を厥す、肅なる哉、肅たり、杓子なる哉、杓子たり

而して無垢の嬰兒と永久の健兒とは總て宇宙より逐ひ出され、神聖、自由、自然等の文字は凡て無意味の空名と爲る、

因より茲に一個の正三角を想像し、其直角を有せる一邊を基底として之を一回廻轉せしむとせば、則ち圓錐を得るは理正に然らむ、然れども凡ての圓錐は盡く正三角より發達せるといふに至ては、吾人は其不合理を辨ぜざるを得ず

凡そ天下の定規大工先づ之が必要を持つは可なり、天下の杓子お三之にて飯を盛るは可なり、然れども今之を以て宇宙の物界心界凡てを規定し若くは之を盛らんとするに至ては、杓子定規如何に天下の通用物たりとも吾人は斷じて其妄を排せざるを得ず

第八　第二の家庭

夫(或は自然の心は叫て曰へりき)吾々の地球の上皮には砂混じ石交り之を踏むに混沌たる塵土何の趣味をも見出す能はず、然れども以て幾多の百合をして、勞せずして紡がざるも無限に美麗しき榮光を帶べる花をば生長せしむるに足る謂ふに吾々の教會は只漫然其相のみを觀ぜば洵に塵埃に堪へず、然れども今樹が人物を去り而して一に爾が僻見を去て試に之を察せよ

凡そ此第二の家庭に於て快然天上の星を指し我を顧て打笑む母人は恩愛無限の力あり、家父の溫言は時に深く我心肝を動し來るなり、若夫其心には皆がエデンに見えて罪もなげに我手を握る寧馨兒を見れば、余其れ永久の嬰兒と爲て宇宙と曰へる一種の搖籃の間に啼かんか、將た樂まんか、余は以下には凡て會堂をば會堂とは言はじ

蓋神聖なる道場を求むる吾々の生命は一、愛は一、望は一、故に此第二の家庭に在るの吾々は道德の途上に於ては互に同行の者たり、生活樹の下に於ては互に同一の祈念者にして、又同一の讃美者なり、搖籃の間に於ては互に永久の同胞なり、願くは吾々の家庭の間には萬物凡て生命あれ、光あれ、願くは自由なれ、又願くは最も神聖なれ

第九　愛

余は或一卷の書を愛す、而して人も亦之を愛す、是れ大に可、然れども余筆を取れば人は試驗管を把り、余試驗管を把れば人は即ち針を取る、而して其思考線の結び附かんとする所彼此同じからず、且夫余は物の本より本に眼を曝らしつ人生嘆に侵されつ、雲間に呀へ渡る月のみは友なき身のこよなき友とや眺むるを、人は夜更くるをも知らで骨牌に余念なきを如何にせむ、人は朝日影のまばゆく臥戸を穿つにぞ深くも打萎れたるがまゝ力なげに起き直れど、余は枕を高ふして穏々太平の人なるを奈何にせむ

斯くて吾々の間には近くて遠き一の潮流ありて互に相隔り、霜枯の冬樹立葉は殘もあらす落ち果てつ、蕭條たる河風にいとゞ武骨なる枝を振り攪し頑固に直立せる所、之を如何にぞ愛の新芽の吹き出る事のあらざるべき、然るも余は深く之を感謝す、春風一たび到れば嫩綠盡く現はれつ、愛は吾々の家庭の間に於て馨しき唯一の香と爲る

而して此間の消息は甚だ幽妙なれば其樂も又從て幽妙ならざるを得ず、蓋家庭の間、金錢の憂を共にするは其性靈を總合するに於て最も力ありとは稱すれども、人生の涙は更に愛を養ふべき重なる天の滴なり、人苟も相愛し互に涙を垂れて相默するに至る、其視線は各々無限の暗裡に入つて、去りながら又互に相合して樂しく相笑む、心は何時しか相解け月深く水心に入り水心全く月を宿す、彼は則ち吾か吾は則ち彼か、要するに愛は純粹に無形的にして之を靈と靈との一致と曰はんよりは、寧ろ吾々の生命と生命とが神聖なる永久の同和と曰はんのみ、愛の世界豈嘗て人を男女に造らんや、蓋吾々が同胞と相携ふて偕に笑ふは美なる進物よりは貴く、雲山を隔てゝ其平安を祈るは別時の握手よりは其情眞なり、而して吾々が己自ら胃袋も財嚢も空虛なる時同胞の爲に一枚の外套を脱するは、之と共に悲嘆するに若かず

斯くて愛は飽まで無形的に生動すべきが故に人或は我に其愛を語らずと雖、其人に就けば則ち春風座に薫じ、我か生命は我體内最深きより躍り出てゝ將に曰はんとす、人生不朽の平安其れ此に在るかと

第十　天露

遠く折れ曲る一逕は畑一面の綠に隱れて未だ過ぎ行く人見ゆ、傍の小河はよべの雨に多少の流を添へながら銀沙の上を走る、何の愛らしの音もなみあたりの草木靜にしめりていとゞ綠に、那の峯の横雲離れては又しては附き纏ふ鳥や何處に歌ふらむ

夏の朝の樂しさは宇宙も凡て美なりけり、芋の畝のさまを見れば生々として深くも疊合へる葉面に置く露白く、其露は廣く青き葉面に滴れし儘、爽く靜止かへり葉の青みは全く玉のやうなる露の全身に映りては互に隱す隈なくぞすき透る、意ふに人生の極意は圓滿の域に至るとし曰へば今假に吾々の性靈をば圓き形に思ひてんか、天の露は好き其雛形なるべし、而して吾々は凡そ生命に滿ち眞理に滿ち望に滿つると雖、吾々の心内最深きに置く天よりの聖露は、其美麗しさ其清らさ吾々が無心に相愛するに至て愈增さるなり、看ずやそゝろに足を停めて彼の愛らしき葉上の露を

須臾に朝の風そよと渡れば綠の野邊に一倍の涼しさ、芋の青葉もそよぎつゝ點々

白き露の――露の其珠は轉々葉より葉にころげて相睦み、終には圓き唯一體、唯一體、程なく那の姿を隔てゝ綠の間にうつろひ來る朝日影、何處も露ぞ輝き渡るなる

第十一　家人

吾々の軒端には一挺の鐵槌と一箇の階子とあり、室にはくつろげる同胞甚だ多くして而して愈將に多からんとす、然れども平生は大抵出てゝ外に在り、常住内に在るものは家父と母上とのみ、家父は吾々の嚴君强て宇宙の秘密を白狀せしむるは兒輩の事、我家父に望む所にあらず、然れども彼は常に安樂椅子に靠りて宇宙の秘密を直覺し心内最深き所常に天上の福音を聞きて之を家庭の間に語る、其語るは宜しく遠韵あるべし、然らざれば恐らくは天地自然の聲にあらざらむ、其容は宜しく光榮あるべし、然らざれば恐らくは純潔純美の人にあらざらむ、滿面是れ誠、滿身是想、彼は時に我家の高樓に上つて曉鐘を打つ

母なる人は我家庭の天使固より學問あるを要せず、彼は恩寵に充ち榮光に滿ち、庭上の花を眺めては床の間の寶刀を見ては兒孫を撫す、其歌ふ所は過去の身に驗せし患難にあらずんば則ち未來の平安、目涼しみ清溫掌手妙に男性の假面を擧げて其眞を示す、家父の說く所は想にして彼は則ち實、家父の言は守るべく彼の言は忘るべからず

蓋家父は鐵槌を擧げて我心の頑を碎き母上は楷子を與へて我を高きに到らしむ其鐵槌はダビデの鐵槌なり、其楷子はヤコブの楷子なり

而して他の同胞に至りては彼等の年猶若く氣甚だ壯、眞理を尋ねて愛を求めて世途を探つて各々外に騁せまだ家庭の幻影を見ず、樂て我と親む所の者は家父と母上となり、家父は余之を敬し余之を感ず、若夫彼の無垢の嬰兒に至ては吁嘘我之を愛す

第十二　外世界

而して吾人門を出れば即ち世界は廣く且廣し、彼の天の星を見るに美麗しう其れ輝き野花自ら下に香ふ、人情正義社會凡て吾人が一臂の力を要す、平安城外吾人は樂て相與に咀勉せざるを得ず

然れども王國は吾々の左に覆り右に起る、吾々は現代の天地に向て些の求むる所

あるべかす、世或は吾々が相率ゐて此の眇視あるを排すれども吾々は猶之を記臆す

吾々は嘗て相携て家を擧げ母に護られ父に扶けられ、春風途上行樂を歌へる事のありき

家には老たる祖父母のみ殘りつ、祖父なる人は離の書院にて同じ頃なる人々を集め餘念もなう碁を鬪みておはしたり、其物語給ふを後にて聞けば、時しも春の半の事なれば庭に横ふ梅が枝は花一面に咲き匂ひて、日は長閑に其枝々の影をば椽先に落しつ書院深う入り來るに、鬪碁の聲のみ打響きたゞ折々はどつと笑ふ聲の起ると見れば、また何の物音もなく蝶や椽先の花影に眠りてやあらむ

斯くて時靜に移りけり

さるをにわかに門外罵り行く人聲打出す半鐘、祖父なる人は其座の人々と共に其れ程遠きに火の失はれしよと、何心もあらず老の歩に徐に一二町ばかりも其方を指して出てゆけば、傍の生垣に偶々火の懸り燃ゆるを見て笞にて打消されつゝれわする

此時吾々は春の遊に走せ果てつ萠え出る草を踏分け流れ流るゝ河を渡り、花に柳に情を寄せ霞やこむる山の靑さを後に見て漸く家路に歸り來れば、我家の方に當りて立つ火の子、漸く近づけば折から吾々の平安なりし滿園は忙はしく運び出され、祖母なる人は何やらむ手に持てるまゝ黑き烟に卷かれ風烈しく――吁吾々の平安なる巢は全く燒きも盡されしなり故に吾々は今に至て紛々世榮凡て見て虛の如し、然れども又吾々は深く不朽の意味を思ふ、吾濟亦賺て競ふ事なく喧ぶ事なく人街に於て吾々の聲を聞かさるを欲す、而して眞道をして勝ち遂げしむる迄は傷める葦を折る事なく烟れる麻を熄す事なからんを欲す、吾々は各々其職任のあるあり苟も人情の爲には、正義の爲には、社會の爲には、願くは此心を以て奮て相鼎勉せんとす母上も亦勞力せざるべからず、永遠の希望を以て新宇宙を經營するは是實に吾々の職任にして天下亦實に吾々が一臂の力を要するや多し、看よ日月の雙輪戒て吾々が肩に在り

第十三　葡萄園

今又彼の葡萄の棚を見るに、吾々が雨に向ひて月を戀ひ泉に手足打ひたしたれ込

ては春のゆくゑ知らぬまに、臥しては大木の林にくだくる音を聞きつゝ風のいとすごしと思ふまに、人に毀られ、譽られ、其心太だ切々たる間に、絃を叩き樞に拏ぢ此心甚だ悠々たる間に、葡萄の實はいつしか鈴樣になりて其枝に連り、枝もたわゝに熟れたる其色、愛らしう寄添へる其珠、愛らしう色づきて見ゆる吁夢ならず

蕨薇の花も咲けば咲け、夜半の木枯も吹けば吹け、雪もみぞれも降れば降れ、吾々は堅く手を相握て凡て一笑せんとす、疊り合へる葡萄の青葉の繁みを洩れてさし來る夕月はいかに其影のさやけきよ、思ふに此園あるか故に我等は勞力し得るか、勞力するか故に我等は此園樂しきか、假令我等全世界を得るとも蓋其賜葡萄の一房には如かじ

加き剔る燈心の記

其一

歸るには家なきにあらず、垣ほには秋萩いまは美麗しう咲亂れてむ、庭には江戸菊もや花あらむ、靜けく澄みし夜はわが屋の上にもや星あらむ、犬は常にわが門邊の守してあるを、若し郵便配る人々も彼の音信持てゆけば殊にお暗き夕暮は彼吠ゑむ

親は止て家に勞苦し見はいてゝ外に在り、見や洵に宇宙の宏壯なるを觀す親は亦此宏壯の裡に在て人道の爲めには何を寄附せんとするか、蓋現實の世界の上に更に二個の善なる大世界あり、一は極めて勞役する人が自ら勵て神我より振はす聲音より擴まり極て信仰ありまた極て齊壯なり、家燃えぬる所、道燃えぬる所、電信柱燃にぬる所、神我絶て動かざる所、その聲音よりして宇宙は終に虛とならず、水は茲に流れ山は茲に峙ち家屋茲に位し、月は更に人情に近いて照す、而して凡の物皆靈明にして此世界に滿んと欲す、一はわれ人が善なる彼の自然と默契するに依て全く不識の間に想形せられんとす、而して此世界に於ては神我が例ば野の花の如きものゝ上をば好て迷行するに由て、父子兄妹の椅子を離れて神我は獨り遠く現實の世界より放たれんと欲す、されど此二個の世界は遙に現實の世界よりは空幻なり、之れ吾人の住むべき世界にはあらじまた住める世界にはあらず

吾人の住める世界は現實の世界より、往々失望の世界なり、空幻の世界なり、故に現

實の世界は往々吾人を驅て全然前の第二の世界に入らしめんとし、然らざれば或は第一の世界を想形せしむ、小さき人の住める世界は小き人の住むべき世界にはあらず

われに兄あり妹あり、ともに濱近き荒村に宿りしてある日山登りぬ、深き草ひらゝ笹が下同じく分踏ぬ、さわどく且荒盡して山はつま木樵る路もあらず、一面丈高き松の樹立すその山の頂にて兄妹三人憩ひ語りぬ、やゝ樹の枝折敷て秋の日暮れぬ松の葉越に見えぬる夕波、その磯打つ音、山傳ふそよ風鳴くあたりの鈴虫の聲、兄は曰かけし話忘れて松の樹の間に出居し月を指しぬ、意ふ妹は殊に父の鐘愛の子、余等何ぞ曾て家を忘れん、されど余等は山を下るも更らに歸るに所なきが如くなりき

其二

竊に思ふ、彼の林巒の景光を望み彼の濱砂の上を行き彼の海波を聞けば、美なる自然は全く吾人が情の發動となり謂ゆる清冷の狀は目と謀り、營々の聲は耳と謀り、悠然として虛なるものは神と謀り、淵然として靜なるものは心と謀る所あるを覺ゆ、吾人はかくて現實の世界より救出されて更に妙想を放て第二の世界に滿てんと欲す、これ猶ほ愛の宙宇が形造られて憎惡までが高貴の顏して枝もたわゝに熟れる葡萄の房をば我に與ふが如し、然れども吾人は到底更に他の至情の發動するを許可せざること能はず、至情は半は現實の世界に發現し半は理性を喚起せんとす

蓋獨り遠山里に家居すれば更に寂寥の門を叩くあり、葡萄棚の下共に宵月の美麗を指せば茲に情愛の我を連繫するなき事能はず、仍て世界を以て唯神我の發現すべきものと觀し空遊依る所なきが如くならんか、吾人は是に於て此一世を幽獨にし庭の松の樹蔭にひとり夜更し星の光榮を欽ぜざる事能はず、是に於てか吾人は亦前第二の世界に入る、然れども余は此空幻の世界を厭ふ、余はまた洵に現實の世界を惡む、

仍て思ふわが爲に超然死生を一にする事は敢て難きにあらず、區々たる形軀が此世代の爲に滅失せんことはわれ何を畏れん、然れども他の爲に一生を一にせんことは極てわれに至痛の哀情あるを覺ゆ、我を生みし者は父母、我を識る者は鮑叔、若

し父母親朋の爲にわが悲むことはわが幸福なるが爲といふ者あらば、吁余はその無情を嘲らん悲しきは悲しき事なり、誰か敢て其余を曰ふものぞ

愛あれば茲に離苦あり、人事と理性とは年々人を驅て幽獨の門牆を窺はしむ、然れども是れ現實の世界の事たり、余は識らじ、竊に思ふ、理想あれば我は却て此理想の爲に壓苦されざる事能はず、我には凡て理想なからむ、現實の世界には凡て失望あり、悲哀あり、憤恨あり、余にも失望あらむ、悲哀あらむ、憤恨あらむ、唯わが至情は常に理性と相抱いてあらむ、我には凡て世界なからむ、至情の動くは唯大海の汪洋たる波の如くにてあらむ、わが心は虛ならむ靜ならむ

其三

滿面宵の煙籠りぬ、遠近の山にはこく薄く闇流れてそのあひだ間の野畠何となくお暗し、破垣にそへる竹藪を窺けば、畆の路そばの樹立を見上ればみな闇掩かゝりぬ、あら磯は既に隔りたれば波は音するほどならず、夜靜けく更けぬ

星は見えぬ

路は露けく又定かならず覺ゆ、されど余等は愛する兄妹相連れてあるを、向の山深きにはもの恐しき梟の聲もがな、されどほの白く樹蔭を離るゝ土藏の屋根處々の樹立、山、唯だ皆宵闇の裡に眠りぬ、たゞ路々歩止るは澄みて鳴くこほろぎなど聲そことも定まらず

宿にきぬ、戸明れはあばれ秋の夜の靜けさや破れん、兄妹茲にまわりて庭べに潜めば、またしても澄みて鳴く秋蟲、風は微に余等が上を渡れり、わが兄は曰ひぬ、うちにも聲勝るは天の使がこそ金の鈴ころがすなりけれいかに轉す鈴ならむ、妹はうち聞きぬ、あに彼の天の使が鈴ころがすは凡てお暗き草むらのもとなり、凡て余至情のもとならむ

其四

月を踏て兄妹砂上の舟に入りぬ

波は大勢あつて頻に宵に乘ず、その濱邊を遁行く所をいく度か心遠く逐へば追はれて余等身遂に舟に在り、兄と妹との顏を見、又空を仰げば夜の煙あつて既に密に四顧に滿つるが如し、舟を隔てゝは明神の森やゝ多く海づらに出づ、六日の月はその森の松の梢にかゝりぬ、殘のかげは夜深の波に冴えぬ、あはれ砂邊にちらかる光

は、舟にまて及ぶ光は、さやかとや曰はむれぼろとや曰はむ、兄は時に言ばなく、妹は唯あたりお暗きやうにして頭低れぬ

北斗は見えしなり、蓋時復はんとして多く能はず、人事は誤られ易し、美麗ならむものは唯人情、永久ならんものは神我、明日見るべき星の下には山海共になからむ、試に船頭に立て限なきの波濤を望む、世界といふ一箇の塊球これを掌上に取て彼の大海の水に投じ見る事能はざるか

名譽を解す

名譽の解、余請ふ試に之をいはん。蓋名譽と砂塵とは人は想考の上に於て未だ嘗て一致せし事あらず、名譽は美の體樣を以て常に考察せられ、砂塵は常に砂塵たり。名譽は愛すべく、砂塵は人その飛ぶに堪えず。光熱が最も美の體樣を取りて最も發射したるものと理想すれば名譽は則ち之に當るべく、砂塵は人その乾燥なると無味なるとに堪えず。然れども今東京の市上恰好の處を選て、茲に日本全土の砂塵を集盛り砂塵積て人々仰見るほどに至らしめよ。然れば之を集積みし者の名譽は其砂塵の最高點にまて高まると同時に、以て四方に喧傳するに足らん。何の爲に之を集積むか蓋是は問ふべきにあらず唯だ高く之れを盛れよ、然れば其名聲は以て四方に喧傳するに足らん。是に於て砂塵と名譽とは全く同一に歸するなり。名譽の外には固より砂塵あらん、然れども砂塵の外には是に於て名譽なきなり。車を走らし、人に衝られ、馬を飛し、而して一生を擧げて唯一に名譽を四方に撒布せんとするは畢竟何事ぞ。一生の毀譽榮辱、身後の是非、凡て馬蹄の砂塵と共に之を踏まむことは能はざるか、海の綱納入道、陸の惡入道、共に齊しく其生命も亦た砂塵のみ、然れども欺ずるを須ゐず唯だ其名譽を土塵にせよ。

彼の月

眺て、川お暗きがうちに渡の船を捨てゝ、こゝに彼の隣の人してわが車を走らす。われは止つて動ず、車は走つて止まず。火と火と合はさりぬ。近き火、遠き火、遠き近き火、ひとつに燃えぬ。氣熱して、家燃こぬ、路燒けぬ。あたり皆燃えぬ。木なく青き草なく、人情なく、正義なく、見世に通貨を握る人、立て形あれども、動かず。燈火燒え、人情熱し。行

々人ゆくと見れども動かず、くる人くれども動かず。家尾立ち、電信柱立ち、人立つ、されども生命動かず、神我動かず。宇宙は熱して、宇宙は遂に虚。否、自ら勵てわが車輪を押す聲は、否、この人の高貴き靈府よりす。わが上に――も見ゆるあはれ彼の霄月は、いかゞ人情に近かるべき。

彼の文學の大家を抗にせんか

宇宙は放縱の間に自ら天法を求めて進前し行く。固より慣たる北風が強て力を極めて彼の路人の笠を奪はんとするは愚のみ。彼の唯威者流が變にとぼけて三井寺に月下の門を叩き以て風流自ら高しとすればとて、吾人は更に現代の爲に流涕するを須ゐず。現代の所謂三文々學者假令之に追放の訓令を與へずとても、必ず獨自からがらくた馬車に載て、各々其光榮の地に急ぐ時あらむ。然れども今、性急なる當年の秦皇あつて茲に文學の大家を抗にする事のありとせば、然り

一　鷲の舍は思ふに既に能くスフィンクスの隱語を解し得たるが。未だ能はずんば好し、來て其毛を燒し其體を燒けよ。冷たる灰燼の間。自ら亦其毛と、其體との新に生するあらむ。一篇の迷路行、なまじいの哲理談、好し爾と共に燒けよ。

一　呂波は根安と雖蝸牛角上又十分の俗氣を留む、秋の舍、耳用劑、白揚子は與に是れ紅紛せる白髑髏の吹き懸けられたる煙の間に皆迷して半生の生涯全く肉燒點血沸くあゝ皆之を燒くべし。

一　揚言御史は讀書の自慢に口舌を爛し、自髑髏の推理より頭を擡げて赤血球の算を說く、一鍋の牛糞滿腕の酒、あゝ骸骨が肉を喰へり。來れ爾も亦た可燃の物質多し。

一　北綠、鍼市は全然の可燃質、其燃ゆるや、人必す鼻を掩ふて走る事最も甚しからむ。死鋒生は現代のペアス、ソアブ、偶ま幽寂を談するも到底俗寶氣を離れず亦宜しく自ら燒くべし。

一　其他、枯消子の如き、宜しく亦自ら來り燒くべし。別天子の如き亦然り。獨り知らす。彼の狄の門は何の翦玄あつて月の忍ばるゝが。若し未だハルトマンの一葉も翻さす、而して天晴現代の批評家なりと思はゞ、あゝ爾ゞ抗亦た茲に在り。

一　紙硯小史に至ては請ふ刑一等を減じて、火坑の番人とせむ。然れども小史酒を

被つては深夜他の輕漂兒と根岸の淸寂を俗了し、極て現代の文界に知已多し、小史能く其れ涙を忍て火の番人たるを諾すべきか、或は寧ろ共に俱に燒かるべきか、撰ぶこと爾に在り。

一　抽象して曰へは、現代の文學は總じて是れ可燃の質にして、永久の實在質は凡て悲て地下に在り。更に自家の輝赫を以て宇宙の混沌たる間に潛める甚深の光榮を照すに足らず。現代文學の大著あゝ皆之を燒くべし。

詩歌類

折にふれての歌

二十六年の夏西鎌倉なる農家に久く宿りして折にふれて

園の戸をさゝんとすれば夜はの風ふく、我袖に螢とまりぬ
夏山のしげみに咲ける姫百合の花のあたりはゆく路もなし
賤の女が草取る野べに匂ふなり姫百合の花撫子のはな
たどりつゝありくも凉し山川の流るゝ路に螢とぶなり
ぬきかへし湯あがり衣風ふけば螢おふべくおもひける哉
妹をなみ由井の浦波立かへり戀してひしとおもひける哉
くれかゝる由井のはまべゆ見渡せば波はたかくもなりまさる哉
二ッ三ッとびたつ魚のほの見えてやゝくれわたる波のうへ哉
をのこらはいまかへるらむ夕まぐれさやかになりぬ三日月のかげ
ふくろふのこゑするかたをながむれればさやかにもてる三日月のかげ

初秋

秋風はやゝにも吹くか虫のねのよひ〳〵ごとに鳴まさるなり

秋夜

おきてまつ月いでぬまに夜はふけてをぐらき庭に秋の虫なく

海邊月

おほ海をふきゆく風に雲はれて波まの月のかげをみし哉

ぬば玉の夜深き波にてる月のかげばかりなる海のうへ哉

折にふれて

波わけてこぎきにしかど和歌の浦いづことはまだとまり定めず

諸人のかしこしといふあら海の八重の汐路にわれはきにけり

かしこしと人のいふなる大わだの神にはなにを手むけん

折にふれて

もみぢてる樹の下水はながるれど秋ぞ河べは靜なりける

貫山公みまかり給ひてことし一年の秋になりぬときゝて君がみ

垣の菊の花どもいま盛なるべきを思ひやり侍りて

これだにも見つゝ忍べと菊の花いく秋までに君は植えけん

ふるく住なれし宿にかへりてよみ侍りける

こづことて旅にあらずはあらねどもかへる歸るといひこしものを

十一月二十六日夜ふけて窓を開けばをりしも月のあかくさしの

ぼれるが人おどろかしなるを見て

山松の梢はつひにはなれけり岡べさむけき冬の夜の月

折にふれて

ま夜なかとふけゆく窓の月かげにみちくる潮の音のさやけさ

大西祝うし病に臥すときゝて雪のふりける日よみておくりける

この頃のいとさむければ願くば君もやすかれ我やすからん

夜はいたく君うまいせよ梅の花いま五日ありてこんてふ

折にふれて

我國の野山の櫻さきにけり大和心はたれにかたらん

いそぐべき路にも、あらずてふ〳〵のゆくらんかたにいざゆきてみん

春のうた

ちかければあすは〳〵と思ふまに梅の林は散りにける哉

さくら花咲ける盛に野邊にきてことしもひと日妹とくらしつ

かげうつる川ぞひやなぎ糸柳水より青くなりにける哉

ちり散ちず花にこゝろはなけれどもきゝすてがたき雨の音かな

さびしさになれはてぬれど世の中はとてもかくても人ぞ戀しき

その子のもとへおくるとて

ふたりしてぬる夜もあらばともし火のきえぬ思はいかにかたらん

折にふれて

夕月夜並木の松のかげふみて立つゝきけば嵐ふくなり

風いたく吹ける日その子の訪ひきて日のくれつ方かへりければ

とほからぬほどにはあれど吾妹子がかへるときけば心まどひぬ

かへりゆく妹が路さへおもはれてゆふべさびしき風の音哉

折にふれて

わすれては妹がすがたもたちねの母かとおもふ折もありけり

雨のふりける夜

いかにせんさめし夢だにあるものを雨さへふりぬ妹なしにして

雨ふればぬるゝといひし吾妹子が袖のみおもふ夜半にもある哉

折にふれて

むかしよりかはりこそせぬをや子てふ道はなか〳〵あやしかりけり

折にふれて

なにとなき山のあたりも秋はよしもみぢみがてらひとめぐりせん

日のくれかたその子のかへるをおくりゆきて獨かへるとて

路すがら妹にかたりてこしかどもなほあまりあるわが思かな

折にふれて

たのしきもうきもふたりがものなればひとつ心に妹とかたらん

妹のごと涙のあらばひとりぬるわが枕べはくちやしてまし

うきはみな妹にかたりて涙さへともにおつるがうれしかりけり
かなしきはあまたあれどもうれしきもあまたある身とおもひける哉
その子のもとより弟のにはかにやめることありていそがしき由
いひおこかせたりければ
さま〳〵にうきごとしげき世なりけり妹がこゝろもいとなかるらむ
もしもけふまどふ心にいてくやと妹まつほどに日はくれにけり
このごろ我いたつきはやゝおこたりたる由きけど身の暇だにさへまだ定めかねたるに親はらからは打捨おき難ければこれより一日たりともやすき暇もあるまじきことなどおもへば我世のおぼつかなさに
たからとて殘す物なき身なれどもこゝろひとつは玉とおもはん
風のいたく吹ける夜
木枯のかぜ大空にふき立てばいよ〳〵さむし冬の夜の月
雨のふりける夜

このころはねざめ〳〵てかみな月しぐるゝおとをきかぬ夜もなし
月あかゝりければ
ことさらに妹があたりもおもはれて月のゆふべは戀しかりけり
恨戀
なか〳〵に戀しきことのねほければうらむるまでに我なりにけり
髮かりにゆきけるにそこの鏡にわが姿のいたく衰へたるがうつりければ
なぞもかく我身まだきにおとろへてこゝろいつまで昔なるらん
ちりになる身はをしまねど土よりも靑きわが顏見るぞ悲しき
春の初の歌の中に
ひとりゆく大路に月はにほへどもおもしろからぬ春のはじめか
大西祝うしのもとよりこの年の始に鎌倉に物して例の大佛を見きとて
しづかなる月の光にながむればわれも佛にならんとぞおもふ

とありければかの佛におがはりておのれ
あはれなる人のこゝろよ月もよし願とならばこの座ゆづらん
又おなじほどの歌なりとて
このごろの夜ごとの夢に入るものは渚の千鳥峰の松風
とありければ
かまくらの春の山邊はしらねども君が旅ねはきくものどけし
折にふれて
日の永くなりしもうれしわが庭もとなりの垣も梅のさくころ
小柴垣ゆひめぐらせし岡邊よりひと枝うめの見ねにける哉
いてゝゆくところ〳〵に梅さきてこのころ風も打かをりつゝ
梅の花さける岡邊にきて身ればしらぬ人さへなつかしき哉
ふたづらにきてはすぎつる片岡の野邊のした道うめさきにけり
汝の岡山にあるにおくりける文のはしに
はる風のふくにまかせてたび表われもとおもふ岡山の里

外よりかへる道にて
おぼつかなこよひは雨になりやせんみ傘めしたり月ひと男
朝とくおきいでゝ丸山の梅あるところにうかれゆきて
うめの花見んとおもひてけさもまたありあけ月夜ふみてきにけり
折にふれて
けふもまたわがものにしてきても見ぬこのしば浦のはるののどけさ
おもしろや月のさかりの花さかりわれも男のさかりなりけり
新聞の號外を賣りゆくがしきりなりければ
ひとりして大路をくればもろこしのいくさのたよりけふもきこえつ
折にふれて
霧もいまだとひこねわが宿の梅のさかりをたれとあそばん
夜ふけて月の出てければ
れもふてとありてこよひもねぬものをいかゞ見るらん春の夜の月
折にふれて

ことさらに春たもしろきものならばこの身は蝶となるよしもがな

折にふれて

あまの子がゆふべをまちてあびきするいその松原月になりゆく

ひとりしていそ菜つむとて吾妹子が霞がくれにいでゝゆく見ゆ

わがこゝろ誰にかたらんかたるとてきくらん人はあらじとぞ思ふ

夕つかた愛宕の山のうへにて

おもひきやくもりはてたる大空にあふげば見ゆる春の夕月

折にふれて

春の夜の波のよせたる月かげにぬれてはさわぐむら千鳥かな

愛宕の山うへより見れば霞がくれにふるさとの山々空にうかび

て見ければこの月二日にみまかりたまひし祖母の君のことをお

もひいでて

かの山はあしほつくばと指さしてわれにをしへし人ぞむなしき

けさもまたとく起きいでて丸山にゆきけるに梅の林は花のこと

〳〵く咲きそろひて霞こめたるあしたの心地いはんかたなきに

初鶯さへもかしこなたにてまだ春なれぬ聲したるがいとおも

しろかりければ

うれしさにこの岡ちかくきて見ればかしこの森も鶯の聲

うぐひすによびかへされてなほもまた梅の木の間をひとめぐりしつ

御垣の下草をよみて

のどかなる春の日和に大庭の花のさかりを見るここちして

をりにふれて

うちつれて木の間がくれにゆく人のこゝろゆかしき松のむらだち

うちかすむ松の木の間にひとひらの花とも見えてとぶてふ哉

折にふれて

やまざくらしらはしるらむ村雲の雨ともならでおほふこころは

ゆふつかた窓前の櫻見ながら横になりて

まろねして月まつ春のゆふまぐれ櫻ちりなはなにごこちせむ

その子とうちつれてそこともなく遊ぶに山のあたりなどめぐりあるきて

ゆきて見ん道こそなけれ杉の木の小高き山に椿さくなり
杉山のおくに椿の見ゆるかなさくらひともと椿ふたもと
山かげにいろのふかくも見ゆるかなこの玉椿をりてかへらむ

をりにふれて

あさぼらけ霞のなかにおとたてゝ櫻うごかす春の山かぜ
てふ〳〵もとひてはなれぬ里河の桃さくきしに駒のあそべる

折にふれて

をり〳〵は窓にあたりて桐のはに雨のふるをとたかき夜半哉

七月二十三日の夜

をしむべきものにもあらぬ夏の夜をねられぬまゝにふかしつる哉

八月十一日の夜

大空の星の光もまどもりてまくらすゞしき秋のはつ風

秋野のかたに

まばぎさくすゝきが原にふきにけりさむくなりつる秋の夕風

をりにふれて

おのづからおひたるまゝの葎生にさくはうれしき朝顔の花

折にふれて

かぜふきし庭の秋萩けさみればあらぬさまにもなりにける哉

九月二十七日三日四日まへつかたより雨ふりつゞきいとわびしければ歌よむ

ふりいでしほどもしられぬむら雨のをり〳〵はれて日はくれぬめり
桐の葉のちりぬるうへにおともせて秋の小雨はけふもふるなり

折にふれて

むら雨のふりのさかりにきましつる母の衣のぬれにける哉
木の葉まだ殘れる庭のしげみより秋風ふきて月のかげさす
桐の葉は庭にさわぎてあし垣のとなりに柿のおちし音する

ゆふつかた心澄みて野べのけしきなど浮び出るに歌よむ

芋あろふ野川のながれ日はくれてにごるも見えすなりにける哉

十月一日ひるのころばかり銀座へと物しけるに道にてまだうら

わかげなる男の子の車おしつゝ雨にぬれゆくを見侍りて

そさな子の雨にひくなる小車をおもしやとだに問ふ人のなき

十二月三十日夕つかたよりにはかに熱いてゝけふもまた心地な

やましければふとんかぶりて歌よむ三十一日

ねむらんとめはとざしてもおもふことなほありげなる年のくれ哉

明治三十年われは三十歳になりぬ元旦とこの上にて歌よまんとて

初日かげことくに人もあふくらむにこらい寺のけさのあかつき

二月の末になりて心地やゝすぐれず熱いづるまゝ打臥しぬ山里

の春のけしきむねにうかびて歌よみ侍りける

みち芝のかれたる上に匂ふなりたがおとしけん梅のひと枝

春のうたの中に

おかちかくやどりをしつゝこの春はきくものにせし鶯の聲

三月七日けさはのどかなるこゑして枕ちかくなきけるにうれし

ときゝながらまたねむらんとしけるにくからぬこゑのあまり

めづらしければ咳嗽のいてんともわすれてとくおきいてぬ

花を見ぬ年はあまたになりぬれどうぐひすきかぬ春はなかりき

ひるのころまでなほつゞけて啼きしに訪ふべきかたもありけれ

ど出てゆかんもくちをしくて

わがやどにくる人もがなおもてにもうらにもけさは鶯のなく

三月十八日の朝のほど空のどかに晴れていと心地よきにその子

の來りしをつれて野べ見に出ぬ小石川なる植物園に入りにける

にそことなく花かをれり

すみれ咲くならの林にてふ〳〵といひつゝ妹がもとに入りぬる

春の歌の中に

梅ちりて風のどかなる春の日をおもひかねても出し野べかな

七日ひくれて熱すこし出てければ打ふしつゝ歌などおもふに寓

威ひねをうちぬ

おぼうみの波よりあらきこゝろをばいかにせよとか妹がなくらむ

鶯

のどかなる春のこゝろにさそはれてさらにのどけき鶯の聲

野べちかくたま〳〵すぐるあき人の耳おどろかせ鶯の聲

九日けふは雨はひねもす風さへそはりて窓に吹き入りけるが日くれてやみぬ

木のまには星さへ見えて春雨のはれしあとより花のかゞする

十六日十五夜の月おぼろに窓にさし入りて花のかげさへ得ならぬけしきなるに枕につきつゝ

しづかなるおぼろ月夜になにとなくおもひいでつる妹が言の葉

折にふれて

打なびく道の小草の花のうへに露ばかりなる夕立の雨

三十一年一月十一日病に臥しけるにひる少しすぎしより雪降り出ければ

さゝの葉にさゝと音してわがかどの坂のほそ道大雪ふれり

折にふれて

世の中のれもひにしづみをらんより梅の花みんわが名なよびぞ

四月十九日朝のほどやゝさむかりしもひるちかきころよりあたゝかになりぬ日もうらゝかなり歌よむ

春の歌の中に

うら〳〵と日もさし入りてたかむらのなかにも春は人のこゑする

里の子があそぶを見れば風ふきて小高き岡に櫻ちるなり

たちよれば土はくづるゝ岡べよりふたえだ咲ける山吹の花

五月七日勤より歸る道にて

いそがじとすれど道のみいそがれておもふことあるけふのかへるさ

ふかみ草

一

かどを流るゝ里河の
おとせぬ水に音すなり
みだれ咲く藥の花の上に
とびたつ魚のそれならて

咲きつゞきたるみだれ藥の
花いやしげき上つ瀬に
わたす石橋ふみならし
なほかなたには見ゆれども

とゞと石橋ふみ渡り

座ばかりなる白雲の
靜けき空にひゞきつゝ
車のおとの聞ゆれば

庭の梢にこゑ立てゝ
かへりましゝよ兄上が
出つゝきませ母上も
いま兄上のみ車がと

いそぎ弟はみ桃の實
袖にみつよつこき入れて
枝もたわゝのみ桃の木
ゆすりながらに飛びおりつ

まだ楓なす掌もて
何の嵐かさそふらむ
庭の枝折戸あらゝかに
かたもさだめず打たゝき

はづれしまゝに押し明けて
おどろく庭の垣ねより
桐の一葉の散るごとく
いざと門べにまひ出てぬ

數まだ淺き秋の日の
あつさもまじる物かげに
母は汲みつる車井の
水こぼしつゝ打きけば

いよ〳〵近く小車の
めぐりくるまも晩しとや
子らがとき衣とくすゝぎ
母も門にと待ちいてぬ

をれてめぐりて里河の
流るゝ岸に座たちて
かげまだあつき秋の日の
靜けき空にひゞきつゝ

玉藻のかほりさきだてゝ
とゞと車の近づけば
弟はゐみつ走りゆき

これ兄上と取り出す

兄はおもひのあり顔に
なにぞと見ればみ桃の實
母もゑみつゝ打みれば
いと大きなるみ桃の實

なにを思の種ならむ
兄はわが手にとりもちて
もゝたび千たび打ながめ
またわが胸におしあてゝ

物をもいはず歩みつゝ
かどを入るさにまた見れば

うす紅に染めいでゝ
あな美麗しき物の色

二

白雲ふかく松たかき
みやまの夢のかよひ路も
草にはあらぬなでし子の
あそぶとならば根をふかく
岩ほのうへも生ひやせむ
はゝこ草にはちゝこ草

父もこゝろは忍草
しのびかねても待ちし子が
いまは歸りし嬉しさに
椽さき近くめしいでゝ

むかしの山の雲の色
夕立つさまも見ゆるらむ

谷の鶯みねの花
問ふべきものゝ何はあれど
父はゐみつゝ言ひましぬ
こゝもきのふは夕立の
晴れては跡もなけれども
みやまはいかゞ荒やせし

きゝも慣れてはありけれど
鳴る神いかに雨いかに
問へば思のあり顔に
太郎はさらに言もなし

さゆりの花の下にのみ
親のみまへに打ふして

くだり道とはいひながら
山路となれば苦しきに
疲れやしつる疲れてむ
あつさも暑しけふの日は
いざ旅衣とくぬぎて
路の塵をも拂はなむ

母は衣をとりいてゝ
いざといへどもみゝな草
おふてふ山ゆかへりけむ
太郎はつひに言もなし

あつさ障りしこともやと
父はいへれど言もなし

母はこゝろやみだれけむ
衣もつ手もさわぎつゝ
やさしき聲のやゝたかく
太郎といへばいねし子の
ねぶり懲くごとくにて
やをら太郎は起きなをり

言はんとすれど胸おどり
なか〳〵聲も出てざらむ
太郎は襟をかきあはせ
み親のみまへつゝめども

つゝみかねたるわが涙
袖にほろりと露ちりぬ

母は女の目もはやく
衣はそこにかいやりつ
太郎が姿つく〳〵と
すかしながらに打まもり
おぼつかなさに寄りそへば
太郎はこゝろさだめけむ

ねがふ母うへ父上も
そこの小ぶすまこゝの窓
障子雨戸もしめなゝむ
うしろめたさは壁にさへ

おもひ知らるゝわが心
きこえあげんもつゝましや

次郎もいねよかなたへと
いふ言の葉もあやしきに
親のおどろきいかならむ
くやしさゝへも交りつゝ
母はきくより胸つぶれ
太郎といふも涙にて

秋とはいへど照りわたる
この日さかりの暑き日に
障子ふすまもたてよとや
父さへかつはますものを

なにたは言はいふならむ
をぞの人よと泣きまどふ

父もしばしは默しつゝ
わが子ながめてありてしが
おもふ心やつきにけむ
障子あらゝに打たてゝ
次郎は外へうながしつ
そこの襖もとく〳〵と

父さへいふに母はたゞ
せんかたなげぬ打たてぬ
されど太郎はなほもまだ
心おちゐぬごとくにて

わが言の葉のもれやせむ
こゝの板戸もさしてよと

うらさびしくも言ふ見れば
母はこゝろやなかるらむ
袖もいよいよしぐれきて
なにたは言はいふならむ
このひるなかの暑き日に
そこの板戸もさせよとや

このあつき日のまさかりに
窓さすさへもあるものを
洩れきく人はなきものを
汗もながるゝけふの日の

あつさも暑く風もなき
この日ざかりのまさりかに

父はさへぎり打笑ひ
さばかりこそはいふものを
家かきくらしみな閉ぢよ
日も洩れぬまでみなとぢよ
あめの岩戸のなかにして
秘すことあらばわれきかむ

父さへかつはいふなれど
母はいよ〳〵墨ぞめの
闇にまどへる心ちして
見る空もなき椽さきに

なびく小萩もあはれとて
いざよひながら戸はさしぬ

戸はさしたればあたりみな
あやなき闇にかきくれぬ
もしもみ山の上ならば
嵐ふきたち木は折れて
雨あれつべきほどを
洩れやはすらむ稲妻の

それにはあらぬ日のひかり
小暗きなかにほのめけば
いま稲妻の雲まより
近くひらめき鳴る神は

山もおどろの心ちして
太郎はそゞろ身もふるへ

さらばきこえむ父上よ
わが母上もきゝねかし
ある夕ぐれのことなりき
雨は木のまをふりつれど
飛び散る雲のなかにして
岩のそば道わが行けば

かなたの峯の間より
ひとむら雲の足はやみ
見るまほどなく山かぜの
袖もたつべく吹くなべに

さらにも雨は亂れつゝ
雲はかゝりぬ岩かどに

あやしと見ればその雲は
岩ねふきまく山風に
むら〳〵立ちてわが上に
吹きも碎くる勢に
われはまろびぬ霧と散る
その白雲のなかにして

その白雲にうもれつゝ
しばしは物もうちわすれ
おき立つべくはあらざりき
なほも嵐はふきあれて

鳴る神さへも耳ちかく
ひゞく響はきゝつれど

あとにて見ればみやま木の
杉の大木はみきさけて
神の落ちけむしるしには
さけたる幹はいろ燃えて
道のまなかに倒れゝど
あやしきものは人の身か

太郎〳〵と呼ぶ聲に
おきかへりてもわが見れば
雲はいつしか吹きちりて
ありしにも似ぬみ山なか

かたへ小暗き木の間より
雨はなほしもふりつれど

こはと驚く岩のうへ
打仰ぎてもよく見れば
いまみ狩にやたゝすらむ
雲とばかりはなけれども
轡ならぶる十數騎
みとものの數につらなりて

たゞ鳴る神のおとにのみ
きゝまつりにしすめろぎの
神のみことはいてましの
みけしの袖もあしびきの

山のしづくにぬれまして
栗毛の駒のしづやかに

なほも太郎と呼び給ふ
たまのみ盤のうるわしく
わが大君は大御手に
梓のみ弓とりもたし
槍によく似たるみ姿は
岩ほの上にたゝすなり

いとしも物のかしこきに
鳥にもなりてみ矢により
死なば死ぬべく思ひつゝ
君のおまへに寄りふせば

數ならぬ身のいついかに
雲の上にはきこえけむ

日ごろ月ごろ戀しくて
筆はとりても見しかども
あまりに花のうつくしく
寫しかねたるふかみ草
おもへる色にとくかきて
とくたてまつれと言ひ給ふ

きみがみ言の嬉しさに
仰ぎまつれば山ふかく
栗毛のみ駒いばえつゝ
雲のおなたに君は早や

かくれましつる木のまより
みとものの數もとほざかりぬる

三

うつくしき
花の姿とふかみ草
てづから庭にうえたてゝ
花さけばあさつく日
にほふ色さへ垣ねさへ
その花の
いろとや春は見ゆるらむ

ひねもす庭におりたちて
花ちれば家にのみ
物をも言はず閉ぢこもり

夜も筆とりてともし火の
あかきもそれと見ゆるらむ
うつくしきいろふかみ草
かゝんいふに

母はともし火ふきけちて
いねよといへば
筆はよな〳〵枕にて
いろは夢にも見ゆるらむ
まぎるかたなきそのさまに

父もやさしき親ごころ
二荒のみやま
ことしは行きも見てきやと

出しやりつるいとし子の
かへる嬉しと待ちつるを

かへれる見れば
心はいづち迷ひけむ
家路は知りて
あはれ歸りはこしかども
わが子ともなきそのさまに

あはれやいとゞ深からむ
われさへ狂ふ心地して
親は太郎を伴ひつ
次郎は家に殘しおき
家はうからに打まかせ

遠くもあらぬ筑波山
上に清けき白瀧の
糸ばかりなるたのみにも
親はこころのひかれつゝ
やがても家はいて立ちぬ

四

孫と子の
外の誇りやこれならむ
妹背ならぶる筑波山
問へば主翁が指さして
酒も賣るなり賤が家

真柴たく
煙に德利くすべても

酌みて醉ふべき旅ならば
これもをかしき神の宮
かたぶく軒に雲とびつ

神の木も
蔦のかつらにからまれて
ひともと幹はさけながら
よろぼひ立てる岩根より
ひとすぢ白き瀧の糸

立かへり
親の心にながむれば
世のうれしさも消えはてゝ
賤が軒端もゆるぎつゝ

巻は山を傳ふらむ

＊　＊　＊

をがむ心はありながら
さても人目の忍ばれて
耻らんかたもありながら
なぞや顔のそふならむ

母は心をはげまして
みづから我子ともなひつ
み瀧の上の不動尊
仰ぎながらにおりたてば
身もさけつべき瀧のおと
ためし涙もせき出てゝ

この世ほかなるわが思
人目もいまは何かせむ

み瀧のしぶき子を思ふ
親の胸にとゆるがせて
仰ぐ岩ねの不動尊
手を合せては打をがみ

日ごとに心こらしつゝ
み瀧のしるし待つほどに
父もしばしはともにとて
み籠り堂によるは寢て

桔梗かるかや女郎花

あたりの山の秋の花
蕊はゆきても折りつれど
心にかゝる太郎が身

＊　＊　＊

されどあやしき世の中の
望はまたも歸りきて
太郎はいつかしら瀧の
しづかに心すみゆきぬ

いまはやすしと
　見るからに
やうやく胸も
　ひらきぬと

親は太郎を伴ひつ
みこもり堂は立いでゝ
なほもしばしは旅まくら
まへの宿にとさだめてき

五

ふけや風
木の葉も夜はの音そへよ
とても寢られぬものならば
山のさびしさ吹よせて
やさしき母がその胸に
やさしきかぎり知らせてよ
　やまのあき風

＊　＊　＊

ともし火の

汐もそへて見しかども
まだ夜はいともながゝらむ
母は寢覺しとこの上
千々の思のかきみだれ

これもみだれし宮瀧の
上よりひらりひらめきて
物の光の見えしより
太郎が病おこたりし

そのあやしさも目につきて
まくらに飛びし物ひとつ
追へば壁にと身をよせて
あるかなきかの姿にも

やさしげに鳴く秋の蟲
などその聲の露けきと
おもふ袖さへ露けくて
母は衣をかさねてき

＊　＊　＊

家の棟にもさわりつゝ
木の葉そよぎて木の葉おち
山べさびしき風の音
父も目さめて打きゝぬ

母は胸さへ苦みて
いはん言葉もなかりしが
いとも安げに寢ぬる子の
顏みてはまた氣もたちて

うれしかなしき取みだし
心づくしの數々を
かたれば父も起きなほり
もだしながらにきゝゐしが

もだしながらに父はそと
枕のもとをかい探り
肌身はなさぬ劒太刀
おもひ堪えげに引よせぬ

遠きかたより音しつゝ
木の葉そよぎて木の葉おち
またも吹きくる山風に
父も涙やこぼるらむ

劒ほかげにかいなでゝ
われも好みしこれの道
學びしほどは神佛
身のまもりともをがみしを

忘れはてたるいまの身の
かくこの頃は打はへて
かなしきことの多かるも
そのむくひとは知らねども

かみほとけ
をがむ心はやさしきと
たち上り
消えかゝりぬる燈火を

かゝぐれば

かゝげてもなほ小暗きに
そとよりて母もかゝげぬ
　そのともし火を

六

仲の秋

指をり待ちしかひありて
あすは嬉しきもちの月
いかにいかにといひいひし
太郎もいよゝ安けきに
祝ひがてらの月の宴
さぞな次郎も待ちつらむ
うからやからも呼びつどひ
あすは家にてあそばんと

たわゝにみのるみ柿の實
この一枝はことにとて
垣根の梢すかし見て
やどのあるじが折り取れは
黄金いろつくみ栗の實
うしろの谷にこぼれしと
媼もそふるこゝろざし
いづれ嬉しき數ならむ
いまひとたびは不動尊
この嬉しさもきこゑんと
母は父をばうながしつ
あすはたのしき家の空
星のかげをも指さしつ
笑ひながらに宿いてぬ

七

太郎はひとりともし火の
てらす椽さきゆきもどり
庭べほのめくわがかげに
小草がもとのこほろぎの
鳴きやむほどもをかしとて
手をひろげては打ゑめば

うま酒と
ゆふべ〳〵の手酌酒
酔はいつしかめぐりけむ
宿のあるじが高笑ひ
しばし〳〵と言ふまゝに
太郎はちかくよりゆきぬ

頭は霜になりぬれど
まだみず〳〵と肥えふとり
重けきからだねむげにも
徳利ほかげにさしのぞき
ふたゝびみたびふりこゝろみて
またから〳〵と高笑ひ
あるしは何をおもひけむ
たつよと見れば紙硯
太郎が前にもち出て

あすは別るゝみねの雲
酒くむ爺がおもひてに
三年まつてふ桃栗や
柿の八年はながけれど

おぢが顔なる瓜かぼちゃ
となりかくなり物ひとつ
　　かきてといへば

首ふりて
太郎はしばしながめしが
ふと火かげにねなほりて
紙わが前にさし廣げ
もだしながらに筆とりつ
なほもしばしは眺めしが
さびしげに打ゑみて
まなこもひかりそはりつゝ
筆あらゝかにふと捨てゝ
つとたちぬ

八

やさしさよ
熱き涙もふりかけて
寄ればかなたも打なびき
きよくたふとく美麗しく
あたり匂ひしかのさまよ
太郎はわまにつと入りぬ
　　光かきわけ

九

たちまち見えてまた消えて
手に取るべくはあらねども
とこめづらなる花の色
魂はかにそれと驚けば
忘れはてたるかなしさよ

太郎はおとも忍びつつ
家づとならぶ床のきの
父がわすれし劒太刀
何心なくとりもちて
足もうきたつわが思

まだたちねは歸りこぬ
まだ月かげはさしもこぬ
宿のあたりをぬけ出でて
を暗きま垣よりそへば
はやも主翁が高いびき

十

身よりはひくき秋の草
わくれば闇にさやぎつゝ

路もなきまで折れふせど
いづれ花とは見えわかむ

おきあまりたる山の露
草葉みながらぬれとほり
袖もしとゝになりぬれど
太郎はさらに知らざらむ

見ゆるかぎりは雲くらく
立てる足べも雲とびつ
かなたの山は見えずして
たゞ小暗なる峰の上

さはる木かげはなけれども

こよひは月も出てざらむ
もてこし劒ぬきはなち
かざせばひとつ星は見ゆ

星は見ゆれどこゝにのみ
光あるらん心地して
いひもやられぬさやけさの
み山きらめく嬉しさよ

いつか心もおどるらむ
太郎はゑみつゝたゝ鞘に
おどる心もおさめつゝ
いづこともなく馳せ出てぬ

十一

はだか山ひとつ超ゆれば
はやましげやま
大空のいや暗きやま
探りもよらば
ゆるぐべく路に岩たち
岩にほら穴

いたゞきに
のぼれば雲のかこみきて
倒れんとせし岩の上
またも太郎は劒ぬきはなち

ゑみつゝも開に氷なす
光ながめて

山の上秋靄にも
　夜のふけゆけは
あやしさや松明あかく
　人のよぶこゑ

十二

瓜はめば常におもふは
　なにのため
栗はめばまして忍ぶも
　なにのため

身にかへて
わが子さきくと願ふより
願ふものなきたらちねの
わが子あらずと見しときは

その驚やいかなりし
　ゆられつゝ
やどの主翁も目をさまし
きゝて驚く太郎が身
さらばこれより一刻も
はやく〳〵と罵りつ

みづからも
松明たかく振りかざし
向ひの宿のあるじをも
をのこも一人かりたてゝ
いづれゆきつる山の上

まだ遠く
ゆかぬ中にと出てゆけば
父もともにぞ

＊　＊　＊

ふりかへりつる坂の下
父のこゑさへまじりしに
さてと驚き立ち上り
太郎は鋤なげ捨てつ

足べ小暗き小篠むら
さやとの音はわがあとに
あわて踏かへ
あわて踏なすその音
み山のあとに

山のあなかぜ吹きなせば
ありとも見えぬ山の木の
枝わが上にさはりつゝ
露また枝におとしつゝ
間にうごめく木の下の
みちも路とは踏みわかず
心ゆくまでま夜中の
山のさびしさ
さびしともなく身にしめて
かへりみながら
太郎はとほく遁げのびつ

十三

はや曉もちかくらむ
山はた山を隔てゝはゐ
ゐなじましらの聲すれど
やゝかわりぬる山の色

たゞ音のみをしるべにて
まだ小暗なるみ山なか
谿のま清水むすばんと
太郎はひとりとめゆけば

まだ小暗なる谷河の
淵はそことも分かずして
さやかに音はきゝながら
岩たち隔つ水のおと

ふりかへり過ぎこし山べ
すかし見て
靜なる谷のけしきに
またふりかへり

手さぐりながらはひ攀ぢて
すべりがちなる岩の上
いはぬ思のをかしとて
太郎はひとりほゝゑみぬ

なほ音のみはきこゆれど
雲は谷間にうづもれて
いく千尋をやへだつらむ
雲のそこなる岩清水

むすばんことも忘れつゝ
踏めば岩ほも聲ありて
小暗くのみは見えざらむ
谷にもみてる望みあり

こゝろのる車のおとは
　玉なして
うつくしき宮ゐはるかに
　うち仰ぎつゝ

なほまことなる谷河の
おとの中にと身をなして
おもひ浮べし物の色
その嬉しさやいかならむ

しづくおちそふ山風に
太郎は衣拂ひつゝ
たゞ嬉しさに立ち上り
かなたの谷まふと見れば

かなたの谷間あかくして
こはそもいかに美麗しく
まことさきぬるふかみ草
袖も岩ほも匂ふらむ

聲たてゝ太郎は手をも
　ひろげつゝ
とび落ちぬあやめも知らぬ
　谷のそこにと

あやめも知らぬ谷のそこ
みなそのの花の色にして
はつ紅のふかみ草
その色にしもまがひけむ

打わたす谷の雲まに
かげ見えて
花やかに匂ひ出てたる
ありあけの月

書翰類

大西祝氏へ送れる書

拙稿の儀今早朝投函致置候まゝ御落手被下候御事と奉存候昨日中に差上度取いそぎ候へども昨夜ふけて漸く脱稿いたし甚延引に相成申候且考案十分まとまらず硬雑の罪輕からず候何分つまらぬ事に疑義相生じ先月下旬までに一通り筋書き丈は致置候ひしも二十六七日の頃より時候にはかに寒きを覺えしと共に例の發熱いたし這度は注意致居候ため甚敷事は無之候ひしも日々少々づゝのぼり月末に一身上の用談のため外出いたし候處熱少々高く相成今月に入り天氣晴を放ちしため宜敷相成候へども四日までは なほ少々の發熱有之景樹論筆記致させ候へどもたちまちいやになり昨日は熱またくさめ候ためみづから執筆いたし候次第四頭八倒の苦中に大論文出て候へども頭腦も少々朦朧の氣味にて論歩しどろもどろなる處もまゝ可有之御直し可被下候本日は昨日より日々翻譯物きたり居引續き筆を取候へども別に發熱も致さず候まゝ乍憚御休神可被下候ニコライ堂

の十字架上金色をかゞやかして朝の雲かきわけつゝはひのぼる太陽は實にわが救主にして肉體精神ともにその恩光に接してたちまち地獄の如き暗夜の苦中より救はれ申候ひさまづきて謝すべき事と存申候あまり狹量の事と存候へどもあまつ日の恩を知ると共にむかし戀しかりし夕月もとんとおもかげ浮ばず夜々指したる北斗星もそのゆくへさへ相忘れ申候御一笑可被下候

六月七日夕ぐれ　　武　之

祝　　様

座右

拜啓仕候發熱の儀は其後直ちに宜敷相成候へども何分疲勞を覺え二三日前より景樹論は着手致候へども文勢碎けて最も意に滿たず昨日も是非起草致候積にて終日机には向ひ候へども終に脱稿致さず本月も何分差上兼候まゝ不悪御承引被下候やう奉祈候但來月は期日の切迫せざる中かならず差上置可申候

野心は五體に滿ち候へどもさて實行となれば窓の破れたる障子の穴ひとつふさぐ事も出來申さず熱のさめし後數日は茫然として何に手を出さんの勇氣もなく心くだけて灰の如くに相成申候發熱中は却りて生氣滿ちたるを覺え申候いかにしても發熱は妨げ度存申候但糊口の事は何分一日を欠き難く候ゆゑその七八兩月は今のまゝにて打過し九月に相成候はゞ定業に就き度存申候宜しき事も御座候はゞ御周旋の程奉祈候

七月五日午前　　武　之

祝　　様

侍史

過日は御病氣之由其後如何に御座候や定て近日は御甘快之御事と奉存候はた御令閨様にも少々御さわりの由何卒十分御保養の程奉祈候小生事は懸念いたし候程の事も無之日々の出勤にも漸く相慣れ近日は却て宜敷やの心地いたし候但寒氣酷敷を加へ候まゝ此上戒慎專一とあるけぬほど衣をかさね申候此分にてはルウソオが病を苦にせずなりてより蘇生せしといひし位の事はいはれると存候學術界に於ける雄圖を起し申候始めほど家に臨來れば疲勞に堪え兼候ひしも近日は歸りて十時迄は勉强の氣力加はり候間乞れのみ喜び居候景樹論此度は多忙

にて起草不致候處次號にはまたつゞけ度存居候ニッシェの事御笑讀被下候や變物には變調子あり凡俗は共に談ずるに足らずと存申候

十二月十九日　　武之

大西祝様
座右

横井時雄氏へ送れる書

先日は途中御見送被下御かげにて泣かずに立歸申候又手退院の儀はいよ〳〵決意いたし本日その手續にいたし申候病院を出るは世界に打て出るにて病軀能く生活の競爭に堪え候や否甚心細きを覺候へどもこゝにまゐり候へば窓前の梧桐日はかゝりて心甚寛なるを覺え申候兎に角今日より生れ變りし積にて何が出來るか出來る限を爲見んと存申候生活より云はゞ赤貧洗ふが如く健康より云はゞ病は膏肓に入り形外の人たるを得ずばわれは天地間蟲のつきし桃の一箇よりも値なきことゝ存申候御一笑可被下候

武之

八月二十日

時雄様

過日御尋申候處信州地方御旅行之由既に御歸京に候や否難計候へども一書拜呈致候然者日之介事腦膜炎にて危篤に相成候間御知らせ申上置候

序に申上候小生も昨今餘程危篤に御座候但是は御一笑可被下候下痢は致候もまだ梨子をかぢる程の蠻勇御座候

（三十二年）八月二十一日　　武之

時雄様

ラット氏渡來のよし御多忙の儀と存申候さて小生事過日來俄に病勢進み來り昨今は室内の歩行も大困難を感じ終日困臥致居候筆取らんとすれは呼吸迫り人生最後の光景を逼出し來り候

九月十日

時雄様　　武之

長澤說氏へ送れる書

御書面拜見君は英雄の前途は其末路の如しと信ずれども余は滿意の長澤說は甚だ與みし易く失意の別天樓は侮るべからずといふを以て當れりと思候土浦の漢學校に於て盛に海軍論を說きし昔にあと戻りするは甚だ君に取て喜ぶべきことにあらずルーソーは三十三四の時まで音樂師たるの冀望ありしも實際音樂は學理的にも實際的にも勉强したれども彼は到底死に至るまで音樂は好くすることは能はざりしなりと自白するにあらずや君が政治論の一面に專ら力を入れんとするは甚前途おぼつかなきを覺候君が政治論は極て昔風の政治論にて君は到底現政の評論家にはなれずと思候願くは君飽まで渡米前の別天樓にかへれ得意は願くは書冊に沈潛するに在れ世界は甚狹く我方寸は更に甚廣きを思へ政治論などは我々年若き者の爲すべきことにあらずわけのわからぬおいぼれに任せて可なり余は五日か六日に何處へか出發致度思居候へども一寸御出被下まじくや但明日中は多分不在なるべく夕方には居候

武之

七月三日

長澤兄

園子へ送れる書

御手紙は只今失園子のと同時に相屆きうれしう拜讀いたし候失園子には明後日は出京とのこと御面會被爲れば久々ゆゑ面白き談話も相生申すべきか小生も六日には歸京可致積

千坂子には愈々逗子に赴かれ候申先づ場處のありしは大慶の至に御座候然し各人雲煙桐隔り候やうのことに候へば若し失園子にして上京致さずば小石川は如何に寂しき事にて候はん愚園子右田子の心ちにはいかゞ秋の夜更けて候はん

蕃山翁の言まことにおもしろく世を吹く風葡萄園にも入りずさびてわれこの心にわれ知らずある花の互の間に相散り候はゞ全く余々の爲に可有之世の中は常に春とな思ひたまひぞまた秋とな

家に歸りてよりは未だ夜の冴えしを見ず候へば木星も北斗もその在處見定め候はず

庭前一枝の江戸菊の花の咲きたる至愛の同情を相惹き申候その美麗しかるはゆゑし夜の星の光る姿にも似て相見え申候若し職務といふものを余等がをふてまいり候その職務の足元にも花の斯く星の斯く美麗しきを見る事も出來候はゞ余等は宇宙にて凡そ偉大の人物にも可有之歟

或はむしろ憂ふべきことか然らざることか存ぜず候へども近來葡萄園中には悉化した人も相出來混然迂化した人も有之候由にて松の樹の物ふりて立てるも夏などは風もさこそ涼しかるべく軒端の清き風には門邊に車待たせて襟飾つくろう人も可有之無何有の郷はこゝかとも浦やまれ候へども失園子が此葡萄園を一團塊にいたし候て法衣の袂にても相容れ月の好きがまゝ何處なり出游も致候はゞ失園子のことゆゑ若し途上に此葡萄園遺失も致候はゞ呵々

八月三十日　武之

おそのさま

まいる

きのふは家出しぬ空ゆく雲と袂吹く風と我足と偶ま散歩の世界に於ていづれが自由なるかを知らんとてなりきされど行んと思ふ所は確とは定まらず停車場にゆきしは朝しも八時の頃なりしならん時間割を見て心定ることあり九時過て汽車に乗りぬ絹の川ばたに游ばんとてなりきふる田といふ處にてをりぬ

余は何處ともなく路のあるに任せて行きぬ數十間せば全くの山路なりしなり兩側は松林にて行くほどに更に人げなく林間の靜けさ寂しくをそろしといふまでにはなく樹々の深く掩ひかさなれる靜けさは何とも曰ふばかりなりき且つ林下は荆棘などの別に掩ひ荒るゝといふことも見えず一面に床敷きて是が野邊游の日に斯る處にも出たらんには失園子先づは横倒れあなたなどは兎逐ひてもするやうにかけ歩きしならんと覺し獨行くも快心のことなりけり

一町も行きたりしや路ばたに泉の流るゝ所に出ぬ若しかゝる山路にて思はず我々が園中の人に出逢もせばわが喜は如何ばかりならんも而もさあんらには余は斯る山路にて愛する友を拾ひしがため余は全く林間の景光を忘れてしまふことと思へり失ふてしまふことと思へり然るに余は泉を得しため山路は余が爲にどれ程の幽情を添へしことならん林木は余が爲にどれ程多く太陽の光線を美麗し

く碎き苔の床の上に落し見せしてとならん

次第に深く分け入るにつけ泉の流は益々太るやうにて面白くはるか路々話す人の亂聲すと思ひて能く聞けば泉の音にて一歩々々面白味のますやうなりき路々聞くは泉の音と知れど若や人の話聲かとも思ひて能く聽けば全く泉の音なり此時余が心には葡萄園中の人の影も星も世界も何もなく唯だわが心泉と同一になりて全く山路を流れぬ

此時わが心は極て自由なりき林の鳥よりも風よりも此時わが心は石に激して驚き飛びのけば何をあわたゞしの泉の音かも

余は行きたり自由に行きたり誰か知らん我は是前橋停車場に默したる大帝王なりしを今も机邊にて靜坐の大統領なるを田舍翁子をつれ妻をつれ余とき合ひぬ

是より長久保へ行く道はと問ふて見れば慣々しげに恭々しく是から行かれやすだんな樣はどこへ行きなさると問ふ路に偶まゐる顏のあるを見ぬ小石川にて愚園子が能く机に置きしよりは色も好く輪も餘程に大きし是が愚園子の机邊に持てゆかれたらんにはと思へり

絹の川はらに出てゐ五六町もあらんか其間は全く水盡きて沙石のみ出て三四間の間のみ水ありて其餘は凡て歩して渉るべきなり水のある所は渡船にて越しまた沙石の間を行きながら見るに水處々石に激越して過るさま殊に快なりき河中に漁夫數多居て鮎を取る一方には近く何山とも知らず雲烟の縹渺たるを見たり水の流と漁夫との外には誰も居らざる川床に起ちてそこ此處快くて歩きまわり一日の望達して極て苦しかりしも一里餘も徒歩し其處にて漸く車を見附て乘り長久保といふ處まで走り五時頃また汽車にて歸りぬ

家に歸れば醫師は來て余は居らずなりしといへり夜は北斗を探し得て間もなく床に入りぬ

三月二日　武之

おその樣

けふは一番やつかいなりし試驗が濟み肩が少しく輕くなれり今少しせば全く荷物なしになるべければ閑散の境に於て我身を健康にするはわが務なるべしまたわが望なり

今にても日暖かなれば毎日野べにゆくもをかしきほど同じ道にて野べにいつもこし懸るは同じ芝生の上なりけふはどうしたのかと思ふことあれども雲雀はその中に聲をきかすなりふところから出る夢は樂しくこそ黄金のやうな世界はわがふところからころげ出た夢かと思へばわが懷は桃の花で滿ちて居るもの歟樂しい夢といふは桃の花の見事に咲かゝりし枝につるさがりて居れり愛といふもの我を取まけりおぼろけき夜の花の香も淺緣といふ柳の芽ざしも棚びく野邊の霞も余も同じ愛といふ不思儀の存在物にてつながれてあるなり身を動かせば花かをるなり足を擧ぐれば美麗なる空にわれ踏入り手をのばせば美麗しきものわれかゝへ餘るなりほゝゑむ桃の枝折る者は非常の樂しきありて折ると知らずや驚にも野べの霞にもわれなる由もがなさむさきびし病氣大切にしてよ

三月二十八日　武之

おその樣

昨日にて試驗全くすみ午後四時より敎師の送別會ありて上野の櫻雲臺へ赴けり餘興として少女の手踊がありいづれもあたまがわれる方の騒なりき余は迷惑なれば敎師よりも早く歸りたり手踊といふはいやみもあれど宜敷部分もあり

けふよりは運動專務とすべし

ひばりは大自在の翼をうち振りて空に快く囀じゆくその時愛する或は最愛の巢をば露のかゝれるまゝ翼にかけてゆくことは能はずとなり彼は而も大自在の音を弄し大自在の身を轉ずる時に於て心配多かる亂のなかへ最愛の巢を殘しゆくは遺憾なき歟となりされど彼が空に囀じゆく時は彼は何等か極て快き生理的の必要につゝかれて上りゆくなり彼が斯くて囀じゆく時は彼が情は飄然として風の動くにまかせ日かげの暖きに任じ彼が神經の活動は何物とも全く調和し彼は心配多き亂も大自在なる虛空もともにいやてなしといふべし　武之

おそのさま

暖きかなわれさへ衣服一枚ぬがさるマイリードも愈々身にしむやう覺ゆ見るとして櫻ならぬはあらず枝として花なきはあらず通りかゝる路すがら又は遠き岡べなど此處にも櫻があつたかと思ふなり我室にすわり居るも櫻は能く見えぬ

昨日野べに出しに桃は櫻と一同に咲き菜の花は黄金色して路ゆく我にめてたきかほりありひばりは得意にうち戯れぬ蝶は何だか蝶とは思ひ難き愛らしき樣して我前をゆきぬひばりの音はつく〳〵足をとゞめて聞てき見れば不思議に美麗なる愛といふものがのどけき春の靜なる空に行えも知らず斯う動いてゞも居るやうに見ゆ歌ふ者は正しく鳥なれどもそれを身にしみて聞くものは我愛情なり曰はゞ我愛情といふものを別の天然の動くものにしてそれを極て調和さして音を出させて見しものといふべきか一もとのすみれの花の上にも我最愛の人の愛といふは美麗しくなりて輝けるなり

四月十五日　　武之

おそのさま

かりぼずまゐしあまり我まゝもいへず或時はをかしい程かしこまつてあるやうに見ゆ火事のありし前日には鳥度向島にボートの會ありて午後より余は日も暖なれば失園子と見物にまいり中途にて失園子は歸り余は最後に河の上堤の上いづれも法科大學萬歳の聲の鳴りどよひを聞きて獨歸らんとせしに大西に出逢ひて同じ車にうち乘り月を見ながら話して歸りぬ不忍の池の端にて月が水にうつるを見て大西いふ芭蕉の句にいふ

いづれかやうつれる月かうつす水

是はうつれる月ともありうつす水ともあり又いづれともなし自力他力もとひとつのものゞとなり

此夜は余は精神身體共につかれ長き旅路を歩みてもせし如く非常の疲勞と之に伴ふ非常の愉快とを以て余は深いそれは深い睡の裡に入れり東京に歸りて以來わが精神は何物にか壓迫せらるゝやうにて健康さへ意にまかせず苦敷やうてなく何となく物苦しかりしが此夜は珍敷疲勞はわが精神の壓迫を解き愉快なる幸福は我が持物となりしなり余は十二時も一時も聞くことなかりき翌朝例の新聞屋が來て高き調子にて話するに目がさめ下におりて顔を洗へば神保町は全燒せしといなり余は用を了へて小川町の警察署まてと車を命ぜしもそばに行きて見ればうつて變りし樣にて沙塵甚敷余は確に方角が見分らず然しわが戀の手紙は燒けし事と確信して歸りき始て知る全く然うなりしなり余が極めてうれしかり

し夜は最愛の人に取りて驚愕と苦難とを以て滿し夜なりしか變化といふはまとに信じ難きほどなり此變化の轉移するは到底足弱きすつぱんの逐ひ及ふべき所にあらず然しすつぱんは何の變化あるも遁るゝを要せざるなり故に鶴龜は萬歳といへり余は茲に不思議なる決心の愈々余に定まれるを覺ゆ

四月十一日　武　之

おその樣

手紙とゞきぬ恰も神なりぬ音おどろおどろし歸り來し夜も夜深にはげしく神なり眼さめぬ兎角に空うち時雨れ外にはいでんやうもなし朝ゆふはやゝ涼きに過ぎシャツは肌を離れずひる後一時二時の頃になれは暑のそのもとにも劣るまじけれども而もわれを誘ふ風兎角してあり都よりは凌宜敷かたなり軒近くすもの樹あり枝たわゝに實のれり時々見れば赤るめるものまさり行くなり然し枝折りて取らん心もなしとに憐のものなるをわが日課は定まりぬ朝は八時頃よりひるまてはカシトひる後は大抵は陽明ゲェテも意の向く時々讀むべし夜は星若くは月とにらめくらせずば紫式部など讀むなり晴れし夜は市のなかぶらつくなり」

わが幼時の詩稿を見出せしにをかしきもの作りあるを見る左に記すはわが十四の時の作と覺し

山房

薜蘿松柏向窓低　荒徑無人苔滿蹊
更悅閑山過雨後　奔泉聲在綠陰西

夏曉

閑味新茶憑碧沙　曉鐘數杵興更加
兒童笑指松頭月　纔漏殘光起栖鴉

左に錄するは十五の時の也

夏夜

明月窺閑牖　漏聲夜正酣
四憐人散去　疎竹影毿々

夏日江村

曲檻干外欲斜暉　鷗鷺沙明乾浴衣

湖上清風始有情　漁舟遠近席船歸

又

拋書支壓懶非凡　起捲湘簾試葛衫
湖上清風吹不盡　離檣又合幾帆々

書きて此に至りて神なりやみぬ

七月十五日　武之

お園様

明日は大洗を經て平磯に到らんとす若し大洗にて雜踏することなくばそこに留らんと欲す

けさもあたり散歩して歸きぬほど長く且廣き池のほとり美どり繁き夏草に露のかゝれるあいだ〳〵を踏分けてゆけば池のあなたはやゝ煙こめて樹立稀なる人の家などすべて綠にあわ〳〵し魚は池におどりぬ野はらにいづれば山近く青く横雲の間より顏を出しまだねむけれども起きて見れば心地好しひばりは燕とさしたがひて空にのぼるひる顏の花はさらじて輪大きく色も一層なり朝いでの汽車はたゞ聲のみ近きにして霧わたれる平野の間を横さまにして馳せ行くけさしも家の朝顏の花二輪咲くなんの世に恨もなく平和に世のさまを觀じはてゝ野の百合を見よといひし人のこゝろは今にめづらしき心地のみす

陽明はあらまし讀み盡し大主意に於ては略ぼ通ぜし如し陽明が大悟せしは四十歳ばかりの時にて世に思ふこともならず龍場といふ殆ど蠻夷の地におひやられて物いふべき人もなく肺疾は愈々狼狽して困苦し居ること三年この間に良知といふ說に悟るところあり後には中心駛々として自ら眞樂あり塵俗の外にいてゝ萬化と冥合し造物者と遊ぶなどいへり故に患難は人を最上の世界に達せしむべしといふ處は彼が最得意の處なりその後陽明は益々良知といふことを考へ年月を經るに及びてその愈々まことにして疑ふべからざるを信じ良知學ともいふべき一派を擧げしは五十歳の時なり此時に嘆息して此理簡易明白なること此の如きにむかしより人なにゆゑ紛々するぞといへり大道は悟りて見れば平坦砥の如きなり

時下あつさ日にまさる身もち心もちすべて嚴正なるを要す夏時の安心立命是

に過るはなし

七月二十九日

おその様

當方にきてより更に夏を知らず夜も好くねむられ申候朝夕はやゝ冷氣を覺候七里ケ濱はいそづたひするにも適せず眺望も宜からず由井濱は第一等に候夕方は魚が波をいてゝおどり申候土地の子供は波の最も大なるを撰て海にとびこみしばしは見えずなる處など興味多く候白波長くつゞく處頗是なき者の遊ぶは何より一段の風光を添へ申候宿のもてなしは殊の外よろしく夜いねてもゆつくり致身體大にくつろぎ申候庭先の菊畝には折々横行先生がいてきて戯れ居候傍の土手にはさつき花いまなほ盛にて見るごとに何等かのながめ有之候一昨日は自家の枇杷の見事なるを葉ごとに水々敷さまにてもてきてくれ風味いたし候處あやしくおのれ戀人に逢ひしやうの心地いたし候家の主人は甚質實にて口も人の前にては好くはきかれずおのれ此家にては一箇の貴公子と相成申候

七月九日　武之

おその様

昨日手紙とゞき申候本日は當地鎮守の祭にて花車が出來村人大さわぎをいたし變な御馳走も出來申候わが座敷の直傍が神の祠ゆゑ取わき賑に候花車のはやし甚おもしろく當の時はおのれも矢張此後に從ふてうれしがりあるきしかと思へばをかしく何卒出來ることなら我もこゝの村人となりて一年に一度はかゝるさわぎも致見度申候日照る樣子昨日よりは餘程烈敷相成候やう相見え帽子一ッにて外をゆけば中々背中あつく候近日は大潮とて沖遠くまで衣をかゝげて淺瀬を踏むことが出來漁夫が岩のあいま〳〵を見いでゝ章魚を取る處までゆきて見ることが出來申候海のこと少も歌に入らざるは波の上はあやしくわが戀のくだくる處にて大秘密に屬すればなり

七月十二日　武之

おその様

滅々子遺稿　畢

書翰類　國子に送れる書

東京日々新聞記事（明治三十二年十月十九日）

◉本吉武之氏の葬儀　去る十五日三十有二の壯年を以て長逝せられたる同氏の葬儀は一昨日午後一時本郷壹岐坂獨逸普及派教會堂に於て執行せられ氏の友人たる麻布教會牧師波多野傳四郎氏司會青年會幹事丹羽清次郎氏履歴朗讀、横井時雄氏追悼の演說をなし遺骸は火葬の上染井墓地に埋葬せらる會葬者の重もなるもの右の諸氏の外世界の日本社主竹越與三郎、本社の朝比奈主幹、帝國大學の同窓學友等なりし本吉氏は常陸土浦藩士の家に生れ勤勉と穎悟とを以て儕輩に稱せられ殊に語學の才に長じ其專攻は佛なるも兼て英獨を善くせり然るに不幸にして去る二十三年三月帝國大學法科を卒業せんとする前四箇月より肺患に罹り經過宜しからず遂に業を廢して病を養ふの止むを得ざるに至り其後は保養の傍ら大藏省に出仕し又時に筆を新聞雜誌の爲に採り本社に寄送せらたるもの亦少しとせず氏の本領は法學なるも哲學文學にも精しく近頃香川景樹翁の歌論を著はさんとし切ては此稿了るの後瞑目したしとて專ら令閨を對手に口授に力め居られたるも業未だ全く成らざるに梧桐落葉とゝもに敢なく易實せられたるは悼むしの限りなり

明治三十九年四月十一日印刷
明治三十九年四月十四日發行

編輯兼發行者　前田園　東京市牛込區北山伏町十二番地
印刷者　島連太郎　東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍　東京市神田區美土代町二丁目一番地